

俳句雜誌

令和六年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第十号

水 明

2024 10月号



《今月のかな女》

銀杏散る空地珍らし路地の中

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

家が軒を並べている住宅地の路地の一角に、ぼつりと空き地があり、そこに立っている銀杏の木から黄葉がはらはらと散っている。かな女には、その空き地自体が珍しく思えたのであろう。何か特別な事情があつて放置されているのだろうかと思ひながら、その路地を抜けてゆく。環境の良い住宅街の土地が家ぐるみ売却され、空き家や空き地が目立つ現今とは真反対の当時の世相が見えてくる。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

人に逢ふこともまれなり螢の夜

栢尾さく子

季音月

蘇るうつし世の色喜雨の中

大場順子

季音花

花火師の魂咲かす未知の華

野田静香

水明集

青嵐杜の騎馬像ギャロップす

寺町知子

鼓笛集

藁の蛇が郷の道行く秋はじめ

阿部幸代

山紫集

病葉や言葉貧しく一日終ふ

丸山マスキ

水明

令和6年
10月号

今月のかな女

今月の巻頭句

花の姿(作品)

私と向日葵(近詠)

洪沢栄一誕生地(近詠)

煌星 雪欄作家近詠鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

新同人紹介

新季音同人・わたしの近詠二句

山本鬼之介

椎野美代子

井上燈女

正木萬蝶

檜鼻ことは

栢尾さく子 菊池ひろこ
五明 昇 ほか

大場順子 梅澤佐江
森川義子 ほか

野田静香 河野はるみ
曲淵徹雄 ほか

網野月を

堀之内長一



水明集

寺町知子
菅原卓郎
飯田忠男
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

52

水琴窟（水明集八月号鑑賞）

池田雅夫

56

俳誌望見

染谷風子

39

鼓笛集

菅原卓郎

58

句集喝采

菅原卓郎

61

山紫集

菅原卓郎

62

水明の記事掲載他誌転載

菅原卓郎

68

水明例会報・各地句会報

菅原卓郎

70

新珠賞作品募集

菅原卓郎

72

水明塾・全国大会のお知らせ

菅原卓郎

78

風声・発展基金御礼

菅原卓郎

79

後記

菅原卓郎

82

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

花の姿

山本鬼之介

日和下駄来よ新涼の皚

川幅を広ぐるやうに流灯会

底紅や七十年を経たる櫛

序の舞の形にひらく秋扇
陽は嶺に背筋を伸ばす夕化粧
隠れ里いま水引の花盛り
舟もやふ夾竹桃の岸辺かな
一寸見は十三七つ秋裕

私と向日葵

椎野美代子

向日葵と外車同居の農大生
向日葵の謁見賜りインターホン
乾坤をがつつり握る大向日葵
向日葵に叶ふ白雲野球帽
向日葵は勝気八方きなくさし
もて余す余熱私と向日葵と
向日葵迷路ゴッホの耳は何処ぞ何処

訪れると縁側に同齡の日焼の主がニコニコ。池面に写る向日葵を金環の目の鯉が浮上、寄つて集つてパクパク。
こん日、向日葵に象徴される国の戦火の映像が脳裡をよぎり、この景との落差に胸を衝かれる。
戦後七十九年続く日本の平和。私の齡の朦朧の態とも相俟つて有難度い平和呆け。ひたすら感謝あるのみの日。

洪沢栄一誕生地

井上燈女

秋晴や威風堂々と栄一像
萬札の顔です栄一葱の里
新札の祝賀パレード街暑し
青淵の論語の里へ小鳥来る
獅子舞の地唄静かに舞ひ納む
栄一の「論語と算盤」返り花
煮ばうたうのとろりと甘き母の味

深谷では七月に洪沢栄一翁の肖像となつた一萬円札が発行された事を祝い、多彩な記念イベントに加え祝賀パレードやくす玉開きが盛大に行われ、祝賀ムード一色だった。栄一翁は明治に掛けて五百社の企業に關して、日本経済の礎を築いた偉人です。帰郷すると地元の人が血洗鳥獅子舞を特別に舞つて見せた。煮ばうとうを好んで食した。栄一翁は「論語と算盤」の有名な言葉を残している。栄一翁の銅像が深谷を守つて建っている。

煌星

季音雪欄作家近詠鑑賞

正木萬蝶

◇なぞなぞからそそりへ(七月号)

春の風呼ぶをんな級長をとこ級長

月を見る月を見てゐる春の月

あれとあれあれは分からぬ百千鳥

伊邪那岐、伊邪那美の二神から生まれた風の神との事だ。

鑑賞以前に読み方に驚いた。風の又三郎の祖先か？をとことをんな、そして春の風に艶っぽさと古代の趣を感じた。月になつたり月になつたり春の朧夜の大人のメルヘン。回文めく。言っている方も答えている方も真剣ではないのだろう。あれ、これ、それ、どれ：全て曖昧。そんな気楽な会話を交わす事の出来る気の置けない相手とは伴侶であろうか。

カンカンカンカン春の踏切過信破綻

狭き歩幅と遅き歩調と春惜しむ

警報音を無視して遮断機を潜るのを見た事は何度もある。

見た事のないカンカン：。奔放すぎる。過信破綻が緊迫感を煽る。破綻する時、瞬時に春の長閑さが消える。

真つ当な句。子供連れのお父さん又は老いた親を労りながらの散歩であろう。優しさに溢れた晩春の句である。

なんとまあ厄介なタイトルの句に出くわしてしまったことか。そそりとは逆の気分、冷やかされて煽られて悩まされてしまった。月を俳句の鑑賞は一筋縄ではないかない。

網野月を

◇アロハ虹(七月号)

アステカへ遥かな想ひダリア燃ゆ

ハワイ四島巡る出船にアロハ虹

ネロ 偲び 聖堂に脱ぐ夏帽子

短夜にロマの咽びやフラメンコ

マチュピチュやマヤ文明に隠れ情報の少ないアステカ、僅か百年余りでスペインに滅ぼされた故であろうか。ダリアはメキシコの国花。アステカで神聖な花として栽培された。短命だった国の花がメキシコの国花になるとは歴史の皮肉か。一括りでハワイと呼んでいるが夫々に個性がある。穏やかさ、自然の荒々しさ、神々しさ：。笑顔と歓声とその先に航を祝う虹と。何より妻がいる。舞台と小道具は整った。

歴史は生き物である。嘗ての暴君ネロも今は名君と呼ばれジブシーと呼ばれ迫害を受けた中から生まれたフラメンコも今では世界中を魅了している。まさに魂と情熱の歌と踊り。

ティファニーを出でて西日の五番街

もうこんな時間？思いの外買物に時間を取ってしまった。夕食は何にする？そんな会話が聞こえてくるようだ。

お二人で同じ方へ同じ歩調でこれからも旅は続くのであろう。終着駅はまだ見えない。これらの情景は次の句集でお目に掛かれるであろう。

五明 昇

◇尽きる（八月号）

小倉 俊子

故郷の紀州紀ノ川鮎自慢
鮎解禁釣竿撓ふこころ舞ふ
鮎好きの夫は跳ねすぎ背骨折る
紀州焼き鮎の塩焼き見舞とす

水源は大台ヶ原、奈良から和歌山へ。紀ノ川の鮎釣は五月第三土曜日から十二月いっぱいである。竿が舞い上がり鮎が跳ねる。川は勿論のこと空気も澄んで身も心も浄化されていくようだ。釣果を求めることは勿論だが喧騒から逃れるためでもあると思う。和歌山の鮎は紀州仕立て鮎と呼ばれ後世に引き継がれていくべきプレミアムな鮎である。限りなく天然に近い姿、形で焼き上がりの色は黄金色である。よく見掛けられる観光地の店先の鮎とは格段の差。全国の料亭や割烹で重宝されているようだ。味気ない病院食に飽きて塩気の効いた鮎はさぞかし馳走であろう。暑い最中であるのでゆつくりと養生、回復を願う。紀州は梅の印象が強かったが新たに名産を知ることが出来た。

わが里は両国花火戦火消ゆ

作者との付き合いは長く横浜の句会で二十年ほどになる。東京大空襲に関して折に触れ話されていた。幼い時の記憶が花火の中に一瞬蘇るのだろう。世界で戦火は未だ燃え盛っている。余談になるが「持ち歩く八月六日の天然水」の作者の句は私の心の奥深く刻まれ日々の平和を噛みしめている。

◇三方五湖（八月号）

鳥羽和風

見霽かす薔薇山頂に五湖の風
年縞の帯の館に虹の帯
年縞に母の梯秋袷
落葉期七万年の帯館

七、八年前に三方五湖を訪れた。山頂公園はまだ整備されておらず素朴な観光地であった。好天に恵まれ眼下の景色はこの世のものとは思えないほどに美しかった。今は四季折々の花など趣向を凝らして観光客を楽しませているようだ。初夏の風が薔薇の香を運び視線を先に移せば五湖が再び広がる。蘇る記憶をもう一度楽しみたくなった。

昨年、句碑巡りに。水月湖のクルーズ船で年縞の事を知った。この湖は様々な理由により年縞に理想的な湖との事だ。この年縞に特化した博物館に虹が掛かる。年縞の無彩色と淡い色の虹の取り合わせが絶妙だ。一年に一層の年縞と秋袷が程よく響きあって古き良き時代の母親の佇まいを季語に寄せている。季節によって堆積物が異なる年縞。落葉もいずれ堆積の一部となる。この地球の記録は若狭の貴重な宝だ。

たたき網しづきも五湖の冬景色

五湖の一つの三方湖の地形を生かした漁法との事だ。湖底に潜む鯉や鮒を竿で叩く時のしづきを瞬間の冬景色として捉えた。四季折々の五湖に寄せる作者の思いを存分に堪能させて頂いた。これからも様々な景色の句を楽しみにしたい。

ゆずり葉

◆季音八月

檜 鼻 ことは

物腰で分る人柄額あぢさる

茂木和子

自分では気づかないうちに、話し方や時折の所作の中に、自身の内面が出てしまうことがあります。無意識なるがゆえに、本来の人となりが表れてしまうのかもしれない。

月並みな言い方になってはしまいますが、とても物腰の柔かい素敵な方であったことを「額あぢさる」の言葉が伝えてくれているようです。額紫陽花は、外側の輪が内側の小花をレースの額のようにして包みこんでいるエレガントで繊細な美しさをもった花です。柔らかな何気ない所作や言葉に、人への思いやりや配慮が感じられる、そのようなお方との邂逅は、きっと素敵な時間であったことでしょう。

空の色海のいろ好き更衣

小倉倭子

衣替えのころ、澄み渡るように広がる空の色は柔らかな水色。海は、輝くように透明度を増し、海の色はしだいに、深

い青色から鮮やかで明るい青色へと変わっていきます。初夏の風に立つさざ波は、光を反射し、きらきらと輝き、海の色に美しい変化を与えます。声に出してこの句を読んだ時、「空の色海のいろ好き」という柔らかで優しい平易な措辞が、すつと心の中に入ってきて、とても爽やかな気持ちになりました。「更衣」は、日本の季節の移り変わりを感じさせる美しい季語であることを、あらためて感じました。

竹垣の結び目新た君影草

森川義子

君影草は、鈴蘭の別名。春から初夏にかけて咲く小さく白い花はとても愛らしく、「君影草」の呼び名は、いつそうに鈴蘭の持つ淑やかで控え目な美しさを伝えてくれるような気がします。庭園や神社、あるいは寺院で見かける竹垣は、辺りに落ち着いた雰囲気を醸し出し、美しい景観をつくりだします。作者が目にした竹垣は、最近、組まれたものなのでしょう。職人の手による結び目の形は、竹垣に美しさと風情を

もたらしめています。

結び目新たな竹垣と君影草の凜とした句の姿に、読んで、その場に身を置いてみたくなりました。

少年につむじが三つ南吹く 内田恵子

つむじが二つというのは見聞きした覚えがあるのですが、つむじが三つというのは寡聞にして初めてで、調べて見ましたら二〜三%の割合で三つ以上つむじがある人がいらつしゃるようです。つむじについては、つむじが右にある人は活発で社交的、左にある人は内向的で落ち着いているとか、つむじを触ると運が良くなるとか、つむじの形や位置がその人の運命や性格に関係がありそうな話があるのも興味深いことです。さて、南風。季節になると突発的に吹くこともあるので漁をする人たちは南風が吹くと天候が変わる前兆として警戒するそうです。三つのつむじを持つ少年と南風が何とも妙味のある取り合わせで、目を見開きました。

つむじ自体は生理的な特徴なのですが前段で述べましたようにつむじが持つ文化的な象徴性や背景のせいか、掲句に詠まれた少年に親近感のようなものを感じます。

盛り塩の飾る店先夏暖簾 笹本啓子

風に揺れる夏暖簾と店先に飾られた盛り塩に涼しさや心地よさ、そして美しさを感じるのには、日本人ならではの感性な

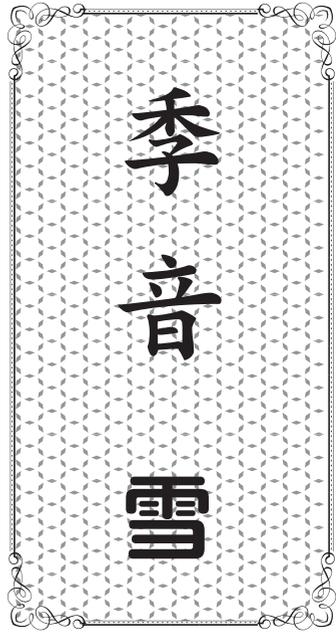
のでしょうか。

打ち水をしてある石畳を踏み、夏暖簾をくぐると、店先には盛り塩が飾られている、もうこれだけで、きつと美味しい料理とお酒がいただけそうとわくわくしてしまします。取り敢えず、加茂茄子の田楽、鱧の造り、あここのあら炊きを肴に冷酒を一杯、などと妄想が膨らんでしまします。夏料理の妄想を楽しませていただいた一句です。

単線や桐の花咲く嫁の里 宮崎チアキ

県外へ旅にでて敦賀駅まで帰って来ると此処からは小浜線。電車を待つまでの時間を利用して売店で蕎麦を啜ると若狭に帰ってきたなとも思います。小浜線は逆方向に走る列車が一つの線路を共有する単線なので、すれ違いをするための駅舎がいくつもあります。時には、車両も二両だけの編成。さて、大鳥羽駅で下車。大鳥羽駅より田鳥まで以前は路線バスが通っていました。随分前に廃止になりました。五月の連休を過ぎたころ、田鳥海岸沿いの道路を歩くと、遠目に紫色の桐の花が咲いているのが見えます。葉より花のほうが先に咲くので遠くからでも目立つのです。そばに近づくといい香りが漂ってきます。

掲句に詠まれた嫁の里が何処なのかは存じませんが、郷愁のようなものを覚え、見知っている初夏の光景を思い出しました。旅情とともに、家族の暖かさのようなものを感じた一句です。



火取虫 菊池ひろこ

宿帳に書きし実名火取虫
火取虫ガス灯の夜は青からむ
初秋の白を用ひしインテリア
縁に母庭に底紅風のすぢ
赤のまま面影の妣翳りたり

立 秋 栢尾 さく子

行合の空 五明 昇

人に逢ふこともまれなり螢の夜
送り火の煙吸ひ込む小画廊
補聴器の中に住みつく虫数多
すでに秋旅に立つ日をきめかねて
身の何処も置き処なし西日背に

火の山や喜雨に濡れ立つ放れ駒
新秋や安曇野統ぶる鳶の笛
無住寺に散華果てなき白木槿
酔ひ初めし芙蓉の宿に解く旅装
稲妻の寸描美しき散居村

宅配の境延昭

晩夏 島津初花

宅配の芳香はなつメロンかな
夜半の秋書架に匿せしブランデー
夾竹桃羅馬の街のテラコッタ
手火花や本所小路の宵の闇
吉兆や庭に水引咲く朝

グラジオラスの茎の頂点たよりなし
冷し瓜黄金色に騙されし
十代の男子逞し盆太鼓
谷川の流れを止めて瓜冷やす
撫子や鉄橋下で傾ぎ咲く

向日葵 椎野美代子

喜雨 鈴木康世

向日葵や帽子投げ合ふ青春像
向日葵に面と向かへば息太し
向日葵をどすんと活くる面構
どすんと向日葵火糲濃ゆき備前壺
パッションのさめぬ向日葵うしみつ刻

故郷の天のほころび喜雨来たる
動植物の糧となりしか今日の喜雨
野も山もふくらみて見ゆ喜雨の中
二礼二拍喜雨の礼言ふ老農夫
喜雨の中精霊集ふ夜の庭

青 蜥 蜴 田 寺 玲 子

秋 彼 岸 鳥 羽 和 風

一 列 に 並 ぶ 大 暑 の 中 華 街
青 蜥 蜴 午 後 の 光 を 全 身 に
突 如 覚 め 真 夜 の 鼓 動 を 聞 く 晚 夏
主 語 の 無 き 話 な が な が 秋 暑 し
送 り 来 し 厚 き カ タ ロ グ 秋 暑 か な

久 び さ を 墓 前 に 詫 ぶ る 秋 彼 岸
白 黒 と カ ラ ー の 遺 影 秋 彼 岸
秋 彼 岸 老 い て ま す ま す 母 の 顔
近 う て も 遠 の く 実 家 秋 彼 岸
方 丈 に 雪 駄 の 音 や 秋 彼 岸

秋 風 十 倉 和 子

神 楽 坂 永 野 史 代

秋 風 と 来 る チ ョ コ レ ー ト 色 電 車
踏 み 切 つ て 秋 風 に 乗 る ア ス リ ー ト
峰 雲 へ 雄 叫 び 挙 げ て 投 擲 す
大 い な る 落 日 の 中 鰯 飛 べ り
残 照 の 鰯 待 ち 櫓 影 絵 め く

じ つ と し て ゐ る う し ろ 姿 の 父 残 暑
身 の 置 き 処 な く ゆ ふ ぐ れ の 残 暑 か な
公 園 残 暑 ま だ 尻 上 り 出 来 ぬ 子 に
鳳 仙 花 ほ ろ ほ ろ 母 は 若 死 に で
文 月 や 二 人 で 歩 く 神 楽 坂

日輪の様 星野和葉

風鈴のちりんと一つ気怠げに
日輪の様みて選りぬ夏帽子
今日はもう吸はせてやらう別れ蚊よ
膝枕の額の秋の蚊いかにせむ
担架忙し終りの見えぬ暑さかな

素足 町野広子

下校子のまづは素足になる習ひ
子は今も靴下嫌ひ素足好き
色白の殊更白き素足かな
実家とは素足大の字解放感
歳時記のすの一番にある「すあし」

通り雨 茂木和子

日焼子の腹も背中も見事なる
底紅や師の好みたる赤絵皿
底紅の紅を引き出す通り雨
災難の架線工事や鶉さわぐ
樹木医の確かな耳目秋初め

日照雨 森本早苗

墓参りして近況一つ報告す
掃苔や声を合はせて経上ぐる
六歳の彼の日彼の声終戦日
大木に絡む通草の高笑ひ
日照雨して背筋伸びたる花野かな

愛しき日々
山中みどり

庭井戸
石井喜恵

頑は無き子戻り夫と見る花火
西瓜食む無邪気な笑顔九十歳
濃紺の麻の甚平男伊達
町の子のこはごは囲む蟬の骸
先のごとは思はぬと決め百日紅

庭井戸は枯れて久しや水引草
小流れに笑くば数多やあめんぼう
手に掬ふ水の濁りや水馬
朝蟬やサラダに絞るマヨネーズ
蟬しぐれ部活帰りのユニホーム

旃檀林界限
網野月を

盆供養
井上燈女

今の私を叱つてください紫黄の忌
枝垂るるは櫻紅葉の並木かな
密やかに勝手に呼べり「瓢箪忌」
大残暑とはお供への余り酒
慰霊塔に差し掛けてみる秋日傘

暮れなづむまで明け放つ盆の寺
迎へ盆子の目に父の戻り来る
作柄の話しきりに盆の客
盆過ぎてみな息災に老いにけり
人よりも地藏が親し赤とんぼ

つくづくと 石山 かつ子

涼 月 大村 節代

あこがれの団地も老いし夾竹桃
つくづくと被爆の話夾竹桃
聴くことも芸のうちなる白芙蓉
豎琴を弾くも芸なる涼しさよ
白足袋の正座の臀よ処暑の客

仲見世を通る川風法師蟬
寝ころべばやがて木乃伊に秋の蟬
秋暑し表情筋よ美しくあれ
手捻りの壺に野の花涼月来
秋の宿衣架に偉ぶる男物

はつ 秋 大橋 廸代

列島 茹だる 小倉 倭子

夏の果湧く観衆の「詩」^{うた}コール
文弱の額に涼風至る朝
はつ秋の宣誓りりし甲子園
飛ぶ鳥の影淡々し今日の秋
「ウリウリ」は籠鳥の名ぞ翌は秋

太鼓橋の頂より対峙大夕焼
地球歪む列島茹だる敗戦忌
妄想の即かず離れず終戦日
八月十五日施餓鬼会へと安行坂
この道で出会ふ人影月見月

季音月

喜雨 大場順子

蘇るうつし世の色喜雨の中
 ボトルシップ出航は今喜雨来たる
 見尽くせぬルーブル美術館残暑
 邂逅に戻る青春鳳仙花
 華やかな「治子」の名告花芙蓉

今朝の秋 梅澤佐江

今朝秋や水路を渡る風さやか
 新涼の深き眠りの誘ひよ
 おしろいや余所行きの顔洗ふ夜
 ひさかたの清しき青や処暑の空
 秋涼し指しなやかに伎芸天

入相の空 森川義子

川なりに曲がる小径や夕化粧
 秋めくや入相の空もいろいろに
 ポストまで二百歩のみち涼新た
 流燈や帰ることなき母想ふ
 起重機の伸びきつてゐる処暑の昼

蟬時雨 松宮保人

夏の夕隠れん坊してそのまんま
 インターホン狼狽へてゐる丸裸
 エジプト展出でて飛び込む蟬時雨
 敗戦日母は苦汁の顔もせず
 葛の花リアスの海へ迫り出しぬ

しれつと 正木萬蝶

独り居の爪を切る音敗戦日
 有終に美醜のありて火取虫
 今生の出口に狂ふ火取虫
 無精髭にをとこの矜持秋暑し
 川の字の真中しれつと竹夫人

遠流 近藤 徹平

夾竹桃遠流をしのび安房の旅
滑走路世界知りたき暮
処暑の雲陽明門の逆柱
たうたうと白紙読む芸盆芝居
独房の窓に守宮や射す朝陽

夏の果 松井 由紀子

昭和かなかたつむり這ふ下見板
「きれいな」と独り言ちする遠花火
ご先祖を冷やしまるらせ盆集ひ
パトカーのおつとり刀野分くる
釣果みな流れに返す夏の果

鳳仙花 高島 寛治

大噴水に消されてしまふ博物館
蟬時雨裏山迫る湯治宿
鍵隠すいつもの場所に鳳仙花
秋暑し廃品軽がる河川敷
新涼や菊坂にある明治の香

一途の狂ひ 丸山 マスミ

火取虫の一途の狂ひ羨しとも
隠れ十字の菩薩の膝に火取虫
吹き上げの奏づるワルツ将^{はた}ポロ
結願の寺の朱印や蟬しぐれ
鳩を生む老手品師の夏帽子

仲秋 池田 雅夫

秋の夜や家近うして足向かず
一筋の川の分け入る花野かな
秋蝶の一ト舞捧げたる社
雨音に消されてをりぬ虫の声
朝霧の村踏切の警報音

軽やかに 渡辺 舎人

秋軽やかか代替りして鯉もまた
本流に外れ秋草のかげに鯉
君病めば細君の瘦す百日白
夕涼や瀬音微かなこだませる
また噎せび恋風邪の夏終はらす

木通 上戸 千津子

木通蔓引けば宙にて笑ふかに
子別れの鴉長鳴き裏の山
通り雨に路地の気化熱蒸し暑し
七五調定番節で盆をどり
叔母よ兄よ命からがら原爆忌

夕化粧 井上 玲子

大寺を覆ひつくせり蟬時雨
夕化粧茜にしづむ秩父嶺
暮れなづむさ庭の明かり夕化粧
初秋の溪流に透く魚の影
郭公や十和田湖に置く旅心

法師 蟬 大塚 茂子

秋簾巻かれ艶めく床柱
縁側に父の揺り椅子法師蟬
つくつくし声なだれ込む鬼石谷
朝礼の静寂破るけらつつき
啄木鳥に湖の水輪のきりもなし

犬の耳 野口 和子

怪我の足庇ひて聞くや遠花火
即かず離れずお齒黒蜻蛉道案内
ぴり辛し大根おろし新秋刀魚
禁酒ちゆうノンアルといふ生ビール
新涼やふと立ち止まる犬の耳

村の中心 内田 恵子

郵便局は村の中心青田風
あめんぼう水切り石と競ひたり
黒南風やジャンクフードの買ひ漁り
暑気中り野菜スープレのカラフルに
懸垂の臍の丸出し夏の雲

ふみちやん 荒井 俱子

ふみちやんは五歳の仏赤のまま
飯事の友は天国赤まんま
何処より湧き立つ風や今朝の秋
鱒裂くをとこの指の刃物めく
鱒煮る手の甲でみる味加減

蜘蛛の囿

川崎道子

蜘蛛の囿に捕へられたる朝帰り
種痘跡のこる二の腕秋暑し
水槽の魚に餌やる夏休み
手の足らぬ高きで笑ふ通草の実
連絡船水母かきわけ出港す

祖母の家

松山清子

手花火の長きを競ふ幼なたち
祖母の読経早朝に聞く蚊帳の中
しぶしぶと紀ノ川河口の水練へ
七輪で焼くもろこしの香ばしく
西瓜三つ水溢れさす井戸端に

祈り

福田千春

八月の折り鶴に息吹き入るる
T字路を曲り切れざる残暑かな
残暑光若き和尚のミニカーパー
南瓜切る包丁古び我古び
外灯下の球児の素振り火取虫

パリ五輪

熊倉千重子

秋はじめ菜園の声ひびく朝
初秋やメダルラッシュに沸く日本
白木槿かつて踊りの師匠宅
秋の蚊のか細き声に寝付かれず
露草や売地の札の裾飾る

この星に

日高道を

病葉や人の世もまた蝕まれ
晩夏光巡礼人の守り札
星飛ぶや西に戦下の子供達
はんざきやヒトは争ふことが好き
この星の小さき軋み夜半の秋

父超え

青木鶴城

薄れ行く父の思ひ出流燈会
祭壇に解体順序盆の月
長生きは父を超えたり秋遍路
包丁の研ぎ味試す処暑の夕
秋涼し珈琲はブラックで飲む

けらつつき 原田 秀子

高らかに終楽章を法師蟬
飛白織る機音かすか秋簾
啄木鳥や奇岩妙義に木霊して
けらつつき般若の面を打つ
秋麗や水琴窟の音高く

信州上田 檜鼻 ことは

荷物置く駅のベンチや氷菓子
櫓門くぐれば小雨半夏生
水一杯飲みて品書き夏暖簾
破れ傘山道を行く雨上り
そのままに今あるままに落し文

残 暑 飛 永 鼓

翻へるシャツの薄さや秋暑し
ただ一つ無花果母に届けたり
無花果の世界にもある貧富の差
もう少し仕事させてよ法師蟬
朝顔や垣根越しに入りて咲く

特集 歳時記の世界

歳時記の多様性と力を問い直す

特集 古都の秋

京都・奈良・大津・鎌倉を舞台にした作品競読

巻頭作品10句

菅野孝夫・勝又民樹・西村和子
森岡正作・長島衣伊子・藤田直子
茅根知子・佐怒賀直美

俳壇

11月号

10月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ

林 桂

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」：鈴木しげを・名村早智子

季節の移ろい／二十四節気：豊長みのる

俳人の住む町：都賀由美子・河村正浩

私の本棚・私の一冊：吉田 葎

旧派の俳句：秋尾 敏

知つてるようで知らない俳句用語：井上泰至

結社の声：「対岸」俳句会

俳句と随想12か月 石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音花

シヤガール 野田静香

花火師の魂咲かす未知の華
シヤガールに会ひたくて秋美術館
叱られしこともありけり盆の月
離れ難き御霊あるらむ流灯会
パレットに朱庭園の初紅葉

色変はりゆく 河野はるみ

裾の聴く草の囁き涼新た
秋めくや田圃アートの色変はる
秋めくや境界の無き蒼き空
芋虫やがまんがまんの神の色
夕化粧母のほひの遠からず

明治の顔 曲淵徹雄

梅雨あがり窓から入る鳩の声
メロン食ぶ舟底を刷く薄みどり
雷遠く断髪式の大銀杏
寡黙なる床屋の主人熱帯魚
涼新た明治の顔の新紙幣

天主堂 保坂翔太

百日紅子どもの知恵の限りなし
奥山に魑魅集ひたる夜半の夏
「社宅の子」と言はれし街や水鉄砲
潮路行く島の学生青蜜柑
長崎忌旅路の果ての天主堂

潮騒 笹本啓子

指切りの約束かたし鳳仙花
潮騒の磯辺にふたり星月夜
菜園を自由奔放南瓜蔓
秋立つや優しくなりしゴリラの眼
沼渡る風のささやき秋立てり

門火焚く

石川理恵

草陰にほのと点りて花めうが
稲妻や雨宿りから抜け出せず
クラシック音楽に乗り揚げ花火
をんな二人言葉少なに門火焚く
まだ巧く鳴けぬつくつくぼふしかな

腕時計

横山君夫

大松の支柱の数や秋暑し
真ん丸に孕む牧牛鳳仙花
朝顔の蔓のゆくへを治めけり
星祭完治の二文字太く書く
盆の月父の遺愛の腕時計

角打ち

染谷風子

願はくは文武両道今年竹
夏料理仕切る女将は京言葉
百年を古りたる鴨居守宮這ふ
角打ちの印半天冷し酒
若竹や嵯峨野を過ぎて落柿舎へ

峰の茶屋

渋谷きいち

飛ばされて当てなき旅へ桐一葉
落ちさうで落ちぬ葉もあり桐の秋
七夕や山車の繰り出す能登の夜
初秋や雲を追ひかけ峰の茶屋
わが園の鳥が運びし萩の花

回覧板

石田慶子

火取虫昔名主の勝手口
帰省子のおづおづと出す回覧板
鬼やんま見たと友言ふ橋の上
まつさらな絵日記置かれ残暑かな
セールとか売り尽くしとか秋暑し

五輪

松島寛久

分水嶺越えて熊川葛茂る
婆の手に産湯の裸くるくると
いなくてもいでもよい爺裸かな
敗戦忌夫婦の数だけ物語
五輪も戦火も人の世終戦日

大噴水 下川光子

幕開けやライトアップの大噴水
夜の噴水二人の影の近くなる
石垣に偲ぶ栄華や蟬時雨
読みかけて脳内乱る蟬時雨
閑伽桶の水あふれさう法師蟬

鳳仙花 瀬戸雄二郎

井戸堀といはれし家や鳳仙花
ほうせんかいつもきげんのよき女
ほうせんかいわさきちひろ美術館
鶏は振り向きもせず鳳仙花
ほうせんかだけが残りし母の庭

平和祭 宮崎チアキ

朝顔の架にからみし一軒家
夕間暮れ水引草の紅灰か
真つ直ぐに立ち上がる子ら平和祭
灯点せば笑ひかくるよ水中花
体操に集ふ面面処暑の朝

加賀蒔絵 野村美子

初秋の茶事や棗なつめの加賀蒔絵
西日射す工場空地の鳳仙花
川床座敷芸妓の酌や美味の膳
処暑の茶事京の干菓子に平茶碗
下町を路面電車や夏の昼

蟬の声 田中章嘉

耳鳴りと思ふ日日の蟬の声
蟬落ちて死出の近さを悟るかな
虫籠に羽搏く蟬の哀れかな
朝顔の絡み出したる干し棹に
さちさちと飛びしばつたに凶はなし

赤とんぼ 野平美紗子

卓上の南瓜に思ふ終戦日
湯加減をたづぬる母や初紅葉
しばらくは前も後も赤とんぼ
百超ゆる朝顔咲かせ母供養
楽しげに駆け抜ける子や青田波

流れ星 葛城 千世子

寝そべりて二人静けさ流星群
迷ひなく一直線に流れ星
生まれ出る何度刈りても川芒
通草の実円熟したる友の居て
早朝のシャワーを浴ぶるクラブつ子

残 暑 鈴木 玲子

フルートの試奏三本暑氣払ひ
暑氣払ひとて暫し源泉かけ流し
残暑また被爆電車の走り継ぐ
即興ブギウギ秋暑の駅ピアノ
秋灯や布切れ集めタペストリー

パリ五輪 高橋 満耶子

行進は船より夏のセーヌ川
号泣の選手にエール立奏
夏の蝶槍投女王のピアスカな
過去最多のメダルの数や日輪草
立秋や灼熱地獄いつ終ゆる

紙香水 梅澤 輝翠

紙香水忍ばせて行く盆踊
ひとり夜の窓辺にしゃんと水中花
揚花火箱階段を駆け上がる
戯れに太き指もてつまべにを
仕立下ろしの加賀友禅の良夜かな

秋空へ 越田 栄子

全力のあとの脱力法師蟬
からつぼの気力体力秋暑し
祝杯の煌めく泡や星涼し
空色に翅を透かせる赤蜻蛉
秋空へゆつくり回る大水車

里山を行く 寺内 洋子

よそゆきの顔のあけびや道の駅
あと五寸届かず悔し通草かな
あけび揺るる谷間は風の通り道
ひぐらしやふるさと後に高速路
鴨居にひとつ年季の入りし洪団扇

月山の水 西幅公子

星月夜大の字で見える山の上月山の水が自慢の冷奴沼杉を真ふたつに切るはたた神酒中花に晴れやか宴夜は更けて炎天や川魚を追ふ子らの策

美肌水 森和子

今朝の秋あと一滴の美肌水立秋や海へ傾るる千枚田秋立つや毗高き修行僧先づ湯気をつるんと剥いて衣被嫁ぐ子と話し切りなし衣被

夏休み 山戸美子

帰省子にジャパンですよと靴の指示過ぎし日はみな胸の中夏休み秋暑し夫の髪刈る婿の技老い忘れ母のユーモア濃竜胆天高し詩吟高高電動カート

蟻の道 綿貫ひさの

朝の蜘蛛部屋からほいと放りけりバス停の列に割り込むと虫久し振りみいんみいんと蟬の聲ががんばは襖の海に溺れをり中山道本陣跡に蟻の道

☆ ☆

現代俳句鑑賞

網野月を

七夕の陸にも食ふひとの列

阪西敦子

〔俳句四季〕 8月号・巻頭句より

天空と地上の対比が見事である。一句の中の措辞が複層的に重なり合っていて統一感を創り出している。夜空と陸、星の連なりである天の川と人の列、一年に一回の逢瀬と行列のできる店の食、などである。十七音にこれ程の句意を表現できるものなのであろうか。

秋雷はドラムに遅れロックフェス

秋尾 敏

〔俳句四季〕 8月号・秋の雷より

昨今の有名どころは千葉市であったりひたちなか市であったりするロックフェスだが、どちらにしろ猛暑と雷雨に見舞われた今年のフェスティバルであった。ロックバンドのドラムスと雷神様の雷鼓の微妙な類似性に句の諧謔性が詰まっている。ドラムスが雷鼓を呼び寄せたように思われるところに妙がある。

秋雷や隠語を理解できぬ奴

山本鬼之介

〔俳句四季〕 8月号・秋の雷より

上五の季語「秋雷」と中七座五の句意の取合せのような作

法になっている。季節外れの雷鳴と、いつまでもだらだらと言いつつ奴の共通性にメタファとして補充し合っているように解せるのである。

かき氷透明人間にも舌が

なつはづき

〔俳句四季〕 8月号・しんと匂うより

諧謔と面白味、そして全人類愛に根差した句である。つまり「透明人間」という措辞に人種を越えた、あらゆるヘイトを克服した、そして火星人や透明人間を同朋として認めようとする超リベラルな感性を読み取れるのである。その感性を「舌が」の一言で表現してしまうところに作句の妙があるということである。他に「遠花火抜けて抜け道だと気づく」「八月十五日男の胸のしんと匂う」がある。

旅は永久なり薄氷を花と見て

神野紗希

〔俳句四季〕 8月号・蜜豆が夜空より

省略の効いた句であり、同時に読者がその省略を補って読む句であろう。読者は自らの経験や知を句に注入して独自に読みを深める、そんな句であると考ええる。筆者は、「旅は永久なり」を永久に価値の深いものだ、と解した。もしくは芭蕉的に人生は旅に似ていると解しても良いのだが、飛躍に過

ぎるかも知れない。「薄氷を花と見て」は二様に解せる。薄氷をまだ少しばかり早い花に見立ててと解せる。一方で花と一緒に見ることがある、とも解せるが、この場合は何の花なのかを想定する必要があるだろう。余りにも筆者の勝手な解ではある。他に「ぶちまけて蜜豆が夜空のようだ」がある。

梅雨晴間走ると速い大男

〔俳句〕 8月号・平和通り商店街より

仁平 勝

座五の「大男」に対する一般的なイメージを払拭している。「しかしながら」というよりも「ではあるが」が省略されているように読むことが出来る。筆者はまず、大谷翔平選手を思い浮かべたが、テレビ報道などを見ればすぐ分かるように彼の機敏さには嘗ての「大男」と表現される人物像の緩慢さは微塵もなく、素早さだけが印象に残る。「梅雨晴間」に「走る」人物はやはりいま作者の前に居るのであろう。他に「平和通り商店街の団扇かな」「古本の中から暑中見舞かな」がある。

けもの道ゆく薫衣香ありにけり

〔俳句〕 8月号・ささめき合ふより

堀本裕樹

中七の「薫衣香くゐのかう」は人物を表現しているとも「香」だけを表現しているとも解せる。座五の動詞「あり……」から察すると「香」だけのように読んだ方が良いかも知れない。そこに人物が居たとしても「香」にフォーカスしているのである。他に「粘菌のささめき合ふや青時雨」がある。

会ひたくて雨の遠出や浜氈んどう

〔俳句〕 8月号・浜氈んどうより

高橋千草

一体何に、誰に会いたいのであるうか。句中には触れていない。連作となつて七句にも触れられていないようであるが、忌の方やお母様と想像できるかも知れない。また題の「浜氈んどう」に「会ひたくて」と読むことが出来るかも知れない。すべて筆者の想像である。どちらにしろ推して「雨の遠出」をするくらい作者にとつては重大なことなのであろう。居ても立つても居られない焦燥感を感じるのだが、青紫色の蝶形花の癒しが作者を慰めている。

眠たげな月の揺蕩ふ百日紅

〔俳句界〕 8月号・新作巻頭より

原 朝子

夜目にもそれと分かるように白い「百日紅」が浮かび上がって見える。その僅かな光源が「眠たげな月」というのである。月光が「揺蕩ふ」ように「百日紅」へ降り注いでいる。ドビュッシーやヴェルレーヌを想起する句である。他に「穴太積弛び鶯音を入りぬ」がある。

草笛の鷗と交はず渡し舟

〔俳句界〕 8月号・時鳥より

宮川 夏

「渡し舟」に乗船した作者の吹く「草笛」が「鷗」と鳴き交わしている、と解釈した。上五の「……の」に切れ字的効果があるとして、中七座五が繋がるとも読めるのだが、そうすると「鷗」と「渡し舟」が行を共にしながらの動きが句意になってしまう。この句は視覚的把握ではなく、聴覚的に把握して上五の「草笛の」が効果大であろうと考える。

『水明誌』

を繙く

(水明八月号)

堀之内長一

(埼玉県現代俳句協会副会長・
『海源』編集長)

蛇好きのあの娘の今は飼育員 石田慶子

虫愛づる姫君をすぐ思い浮かべるのは少々短絡的か。子どもたちは虫も爬虫虫類も大好き(嫌いな子どもたちもいるかもしれないから、こころは半分こ)。蛇はくねくねして無気味だし、目や舌も怖そうだけれど、好奇心にはかなわない。そつと触ってみる。すると次は大胆に抱いてみたりする。意外に皮膚はさらさらと冷たくて、その不思議な感触はそれほど悪いものでもない。毒蛇でもないかぎり、まるでペットのようである。それが何故、だんだん嫌いになつてしまふのだろうか。かくいう私も蛇は苦手。田舎育ちなのに、長じて蛇にまつわるイメージにとらわれ過ぎてしまったのだろうか。

蛇好きだった女の子。恐らく蛇だけでなく、さまざま生きものを愛しむ心の持ち主だったのに違いない。毛虫はいずれ美しい蝶になることを知っている姫君のように、幼いころの夢を育み、ついに飼育員になつてしまったのだ。掲句は事実を淡々と報告したように見えるのだが、上五の「蛇好き」というドラマチックな言葉が立ち上がつて、何事かの物語を語り出す。その娘をみつめる作者のまなざしがまぶしい。

たかんなを剥く戦争の記事の上 森 和子

読み終わったあとも、大変利用価値のある新聞紙。ものを包むのはもちろん、掃除の際のアイテムとしても重宝されている。日常生活に密着した新聞紙なので、俳句でもさまざまなかたちで詠まれている。ふるさとも送られてくる野菜や果物が地元の新聞紙にくるまれているという懐かしい句も多い。掲句のたかんなの下に敷かれているのも、恐らく新聞紙だろう。何気なく広げた新聞紙。筍の皮を剥きながらふと目に入つた戦争の記事。今ならウクライナかガザにかかわるものかもしれない。遠い国の戦争、見知らぬ人々が戦っている戦争、情報のひとつとしての戦争。戦争でさえも、日々消費していくしかない日常の有りように、俳人の意識は引きつけられる。今やデジタルの時代で、すべてが画像として流れ去るときに、アナログな新聞紙は何事かを訴え続けている。液晶テレビやパソコンの画面の上で筍を剥くことはできない。人類の草創期から戦争の止むことはなかったことに思いを馳せると、たかんなという古名もまた、雅を越えて何事かを訴えているようだ。でも、句のものはどうぞ美味しく。

新同人紹介

— 令和6年 —



新井のり子

水明入会 令和三年
所属句会 たかんな俳句会

待宵や易者静かに未来告ぐ
切り返す言葉代りの新走
敬老日眉間にはたく粉おしろい
ビル街に緑蔭低く低くあり
ラフランス上手に剥いて嫁に行く

水明同人に、お迎え頂きありがとうございます。二年前より川口市『たかんな俳句会』に加入、毎月、楽しくも充実した時間を過ごさせて頂きました。毎月、山本鬼之介主宰の直接の御指導に恵まれ句作の基本を一から学ぶことができいております。句会の先輩の皆様との交流も魅力です。同人として今後も俳句に精進してまいります。



石関六弦

水明入会 令和四年
所属句会 めだか句会

新しき庭あたらしく花水木

涼風やロイド眼鏡の似合ふひと

団子屋の坂の其の先秋の風

愚痴終へて頭からいく柳葉魚かな

オリオンのベルト辺りに願ふ夢

この度は水明同人にお迎え頂き誠に有難うございます。
俳句を詠む楽しさを知った人と知らない人。自分は前者
になり、本当に幸せです。何より句会での非日常な時間は
刺激的で、生活にゆとりが生まれました。今後は皆様の御
指導の下、自分にしか詠めない一句を目指して日々歩んで
行きます。



糸井しるく

水明入会 令和四年
所属句会 蝸蚪の会

梅雨の星ゲリラ豪雨の去りし夜半

山寺や芭蕉と曾良の汗の跡

乱鶯の淀みなきこゑ湯治宿

『こころ』読む墓地に手向ける蕎麦の花

啄木も尾崎豊も十五の月

この度は水明同人にお迎え頂き有難度うございます。月
を先生や仲間の皆様と学べる事に感謝し嬉しい思いです。
スマホやSNSが侵入し、言葉を紡ぐ、編む、認めるを失
いつつあります。俳句の言葉を信じ楽しみながら精進しま
すのでどうぞ宜しくお願いします。



大島千恵

水明入会 令和二年
所属句会 櫻蔭句会

鉄橋を渡る汽笛に谷紅葉
暗き朝急ぐ足音十二月
夕空に黄色溶け出すミモザかな
文豪の住みし町並風光る
あかね空うかびし細き春の月

この度水明同人に委嘱いただきありがとうございます。
俳句はまだ未熟な者ですが、一生懸命勉強させていただきます。

皆様方に私の力についていけるか不安ですが、努力いたしますのでよろしく願います。



倉田星歩

水明入会 令和四年
所属句会 第三例会
若松例会

水脈を切る棹の滴に水温む
春の星池に映るは乙女座か
夕焼を背に下る山男
落ちかかる棹を支ふる首領雁
熊手売り背に負うや塔庇

このたびは同人にご推挙頂き有り難うございます。誠に光栄に存じます。四十年ほど前、星野紗一主宰の下で第三例会に二年ほど出席させて頂きましたが、その後仕事の事情等で全く俳句から離れておりました。最近になって再び勉強したくなり、事務局にその旨連絡したところ、鬼之介主宰から以前に入っていた第三例会に参加されてはという暖かいお言葉を頂き入会した次第です。今後とも何卒よろしく願います。



香田裕誌

水明入会 令和二年
所属句会 櫟の会

先達に習ふ作法や遍路バス
もどかしき札所の納経山笑ふ
鳥の声頼りに宿坊木の芽和
石鎚山の囀りゆたか遍路歌
巡礼の余情尽きなく遍路旅

年を取り母の死もあり供養を兼ね遍路を始めた。秩父34ヶ所を事始めに坂東西国と年月を掛け百観音を巡拝した。更に四国88ヶ所を巡礼し結願となった。元来徒遍路が望ましいが年には勝てず車を借りるか遍路バスに頼る事となった。多くの想いを心に我家の仏前で香を焚き経を唱える習慣が身に付いた。



寺町知子

水明入会 令和四年
所属句会 めだか句会
第五例会
俳句の手ほどき

早朝の玉砂利濡らす外宮秋
御帳みとほりの舞ひ上ぐ奥は秋の空
神官の白手ぶくろの祈り秋
伊勢の秋仮屋ぼつんと遷宮跡
秋の風実かぜにまさる伊勢の海

この度は水明俳句同人にご推挙頂きましてありがとうございます。ございます。俳句歴の浅い私にとって句会は新鮮な刺激と大いなる学びの場となり一喜一憂しております。未熟な私ですが、鬼之介主宰、月を先生はじめ先輩、句友の皆様には今後共ご指導賜わりますようお願い致します。



皆川更穂

水明入会 令和四年
所属句会 皐月の会

古木より星をしるべに薬ゆる
歳時記を捲り五感の更衣
大擗揺するビートや秋のジャズ
満月や決して見せぬ裏の貌
六連星地球は不眠症のやう

この度は水明俳句会同人にお迎え頂き有難うございます。
山本鬼之介主宰のご指導のもと、句友の皆様との楽しい句
会を通じて俳句の面白さに触れて参りました。俳句は未だ
初学勉強中ですが日々研鑽を積んでまいりたいと思います。
今後ともよろしくお願ひ致します。



森下山菜

水明入会 令和五年
所属句会 皐月の会

祭太鼓浦和にや八つの駅がある
金魚屋に007の着信音
鯉跳ぬる其処へ水陸両用車
ぴりぴりと走る貫乳今朝の冬
嬰兒の抱き方猪の捌き方

このたびは、同人の列に加えていただきまして、ありが
とうございました。
今はただ、いいものか悪いものかもわからずに句作して
おりますが、もう少し世の中がわかるようになりたいもの
だと思っております。どうか今後ともよろしくご指導のほ
どお願ひ申し上げます。

わたしの近詠二句

梅澤輝翠

鶏頭は貰はれて行く満月に

十五夜になると畑で作った鶏頭の花を切って近所、親戚知人等に配っていた母を思い出します。文机に絹の敷物を敷き十五夜用の花瓶に芒、紫苑、鶏頭を生け十五個の団子、そして梨、葡萄、さつまいも栗などを供えお月様を愛でました。

「お月様が隠れたから頂いていいよ」と云う母の言葉においしく頂いたものです。今でも同じ様に設えて母を偲んでいます。

魚河岸に四代目あり鷹の舞ふ

人生の師と慕っておりました方は築地に二代目社長として店を構えておられました。ご自身の母上も句集を何冊も出されたとの事で、私が新珠賞を頂いた時は喜んで祝の席を設けて下さいました。お礼をと云う私に一句詠んでくれたら嬉しいと言って下さり、今は孫の代とお聞きしましたので、この句を短冊にしたためてお渡ししました。今は遠くに行ってしまったわれました。忘れ難い一句です。

越田栄子

雲梯を渡る手に豆風光る

娘の子供達と遊びに行く公園は遊具がいっぱい。運動が大好きな子供には持つて来いの場所である。雲梯に挑戦したもののおっけなく断念。それからしばらくたつたある日、私に「見てて」と言う自分の身長の倍以上の高さの雲梯を見事に渡り切ったのです。

どや顔の小さな女の子の手にはいくつもの豆が出来ていました。公園を渡る春風が心地よくまばゆく感じられた。

未知数のQRコード冬銀河

今世界中で使われているQRコード。日本生まれの技術というから驚きです。スマホのカメラをかざすだけで情報を読み取れ決済も出来る。その情報たるやまさに未知数です。一方で夜空を埋める冬銀河は冴え冴えとした趣に神秘と不思議さを感じます。

小さなQRコードの中に人の造り出した無限の世界と大きな宇宙に広がる冬銀河の果てし無い壮大な世界に思いを馳せた一句です。

寺内洋子

目鼻なき紙の雛の笑まひかな

古い友人から和紙で作った手作りの小さなひな人形を貰いました。お顔は綿棒で出来ていてなにも書かれていません。しかし眺めているとほわ〜とした微笑みが見えてくるのです。こんな時、日本人でいいなあ、日本人に生まれていいなあとの思いが沸いて、句作にも通じるようにも思え、気に入っている句の一つです。

下萌や苦しき恋もせし記憶

雪国に育つと春の訪れに殊のほか気が浮き立ちます。小川の近くの雪が消え始めると、びつくりするくらい青々とした雑草が元気な顔を見せます。子どもの頃はそれを見るだけで気持ちが悪く立ちました。雪が嫌いでもなかったのに。ある事情で、結婚の日取りまで決まっていた人と別れる事になったその春から、早春が苦手になりました。しかしこうして句に仕立ててみると、苦しくても心に残る記憶のある人生も悪くはないと思えます。

西幅公子

碧天に稜線つづき神送り

秋の澄みきった青空が何処までも広がり、日本の屋根と言われる北アルプスを檜の頂上から眺めると実に雄大である。稜線は雪を残し青々と放射状に長く伸びている。暫し下界を忘れて見蕩れている。

そんな天上を神々は出雲に向かう。いろいろな形をした雲の舟に乗って、みんな悠々と進んで行く。あれこれと神々の様子を想像してみると本当に楽しい。

河鹿笛往時を残す芋車

水明の若狭の旅に二回参加させて頂いた。美しい海と山、美味な湧水、蛙の音、昔を偲ぶ鯖街道と宿場町、若狭が大好きになった。街道の脇には山から流れ出した冷たい水が勢いよく流れている。何の音かと近づけば芋車だった。軽快に回っている。もう皮も剥けて真白なつるつるの芋が入っているのかな。昔の良い所をそのままに残していて、美しく静かな若狭に住んでみたいと強く思った。

森 和子

山跨ぐ虹をくぐりてハイウェイ

雨音で目が覚めた。久し振りの温泉行の日なのに。それでも予定通りに、山形方面に出掛けた。雨というだけで気分は乗らない。

幸いな事に、栃木辺りで雨は止んだ。すると、左右前方の山を跨ぐ様に大きな虹が現れた。余りの美しさと大きさに、尋常ではない驚嘆の声を出して助手席で騒いでいた。

「虹」の兼題が出た時は、その時の虹が脳裏に浮かんだ。

佃煮屋の暖簾染ぬき薄暑光

菩提寺の墓参りの後は、清々しい気持ちで谷中銀座をぶらぶら楽しむこともある。「夕焼だんだん」を通り、時には千駄木、根津方面まで足を伸ばす。近頃では、外国人が多く楽しんでいる。時代も変わったとつくづく感じる。帰路は、お決まりの佃煮屋に寄る。いつまでも続けたい、そして楽しみたいと思っている。

山戸美子

十三の叔父に馳せるや原爆忌 毎朝の靴を揃へる夏休み

母より四歳下の弟は、四月に県工（県立広島工業中学）へ入学したばかりで、毎日勤務奉仕に出掛け、八月六日も太田川付近の建物疎開をしていました。その日、原爆が投下され祖母と母は翌日から捜し回り、九日に太田川の土手に置かれた服と弁当箱をみつけた祖母は、それらを抱きしめ、ただただ踵を上下させ嗚咽していたそうです。すでに遺体は山積に火葬され、そこのお骨を頂き埋葬したそうです。戦争さえ無ければ生きていたであろう十三歳の叔父の事を思い祖母の気持を考えると無念でなりません。今も世界では戦争が続いており胸が締め付けられる思いです。一日も早く平和な世界に戻れるよう願ってやみません。後の句は、尊い先人の方々の御蔭で今の平和が有るのを感謝しながら、帰省した家族の靴を毎朝微笑ましく思い揃えている自分がいると言う句です。合掌

綿貫ひさの

妹の手編みセーター旅の空 春光や笑顔の二杯目赤ワイン

この二句は「本人しか読み解けない」駄句ですが、私はどちらも捨てられない句です。一句目は、妹がセーターを編んでくれた時「これを着て鶴岡の水族館に海月を見に行こう」と約束したのに、心臓発作で突然ひとり旅立ってしまったのです。旅行、観劇、買い物等いつも一緒でしたから、今はその娘とあの時、この時と思い出は尽きません。二句目は水明忌に星野光二前主宰を偲び詠みました。今は無い「婦人句会」の帰途皆でデニーズに寄った時の風景です。新参者の私は一番端で話題には入れませんでした。赤ワインを手にした先生を中心にとても和やかな雰囲気でした。そして二杯目のワインは誰が注文したのかびたりのタイミングで届き、この時の笑顔がとても素敵でした。句は光と二の文字を詠み込んでみたのですが、中八を今日発見し、呆れて反省しています。

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、下記により作品を送って下さい。主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
[作品] 5句 [受講料] 1,000円
[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

俳誌望見 染谷風子

「栞」 二〇二四年七月号 通巻八八号

主宰 松岡隆子 発行所 東京都西東京市

岡本眸の「朝」の後継誌として、平成二九年四月、松岡隆子が東京都西東京市にて創刊、令和二年四月、松岡隆子が主宰に就任。俳誌のモットーは、「自然との関わりの中に日々の哀歓を詠む」である。

巻頭の主宰詠「薔薇の香」十二句より三句。

薔薇買って帰らな全句集届く

装幀はマテイスのブルー月涼し

遠き海とほき白帆や薔薇の雨

一句目、作者の師岡本眸の全句集が栞俳句会の総力を結集しここに完成。今日は師の愛した薔薇を買って祝いたい。二句目、「岡本眸全句集」を私も拝見した。表表紙は濃いブルー、裏表紙はやや薄いブルーで、マテイスの絵を思わせる装幀である。三句目、「とほき白帆」は理想とする師の句境か、その道は遠く厳しい。下五の季語「薔薇の雨」が象徴的。

同人自選「蘇芳集」七句十五名一〇五句より共鳴句五句。

四月馬鹿三文判でいいといふ 川上 昌子

一灯に人寄る仏間遠蛙 清水 裕子

かばかりの畑を大事に耕せり 下平 直子

春暁や夢の続きの遠汽笛 松原ふみ子

むかしより今に強情田螺鳴く 峰岸よし子
一句目、婚姻届か離婚届か、現在どちらも認印で届は可能。「四月馬鹿」と取合せた所が諧謔。三句目、農は国の基本と考え、丁寧な野菜作りに励む作者に感銘。五句目、実際には田螺は鳴かない。持つて生まれた強情な性格は、鳴かない田螺を鳴くと言ひ張る。これぞ強情の極み。俳味の漂う句だ。

主宰選「縹集」より共鳴句五句。

紙あれば文字つらつらと花あせび 濱地恵理子

朧夜の会うておかねばとふ齡 室井千鶴子

考へて棄つる一句や修司の忌 梶浦 道成

しばらくを一人であたき藤の風 旭 幹子

号令に歩きだしさう葱坊主 町田 洋子

本号は七周年記念特集号であり、「栞」の三賞である「縹賞」「栞賞」「萌黄賞」が発表されている。「縹賞」は川上昌子氏。受賞作品三〇句より三句。

物置に石臼のある春の鬧

湖をさびしがらせて遠郭公

ふりむきしところに鏡冷まじや

「栞賞」は植草京子氏と田坂孝志氏、「萌黄賞」は小村絹代氏、梶浦道成氏及び町田洋子氏が受賞され、受賞作品各三五句が掲載されている。紹介したい句が多数あるが紙幅の都合上割愛したい。今後の栞俳句会の益益の発展を祈りたい。

山本鬼之介 選

水明集

青嵐杜の騎馬像ギヤロップす
紹を召して身じろぎもせず砂かぶり
鈴の音に耳澄ましゐる君影草
白鈴は友の顔顔君影草
坂道が海へと続く夏館

さいたま 寺町知子

宅配の置荷を覗く向日葵よ
青田風ボニーテールが突つ走る
忠次の「忠」我にもありて青嵐
夏の夜やサイレン遠く消えゆけり
外灯に蚯蚓涸びぬ夜半の夏

飯田忠男

常磐木のそよぐ一つ家青田中
老次の黙にてつする夏真昼
花道を退くや六方夜半の夏
夏の宵一羽もどらぬ伝書鳩
古伊万里の絵柄透けたる夏料理

伊奈 菅原卓郎

猫車ぼつんと置かれ青田道
後ろ手の農夫眺むる大青田
年次に粉を吹くやうに半夏生
夏の夜やとなりの門扉閉まる音
夏の宵外食誘ふ子の電話

さいたま 清水桂子

茅葺きや土用鰻の客になり
炎昼や白線歪む甲子園
背開きの土用鰻や江戸の粋
向日葵や福助のごと並びをり
一粒を含み幸福さくらんぼ

新 曆文

曼荼羅の經典ゆかし半夏雨
羅の僧侶の読経堂ぬくる
一番線に遅延の報せ晩夏かな
雪溪に臨む構へを今一度
大雪溪をゆく人影の黒点よ

岡田宣子

耳元で何か囁く青葉風

さいたま 菅原真理

越谷 阿部幸代

枇杷の実の熟れて娘の婚の式
山開き星空まさに別世界
時を打つ音のみ残る梅雨の闇
夏海揺らし地球の一廻り

機関車の勇姿迎ふる山開き

平塚 丸屋詠子

さいたま 森下山菜

天上へ樂を奏づる古代蓮
七夕の飾り消え去り街無聊
本殿へ急坂つづく炎暑かな
隣席の百合が気になる電車旅

若竹の天辺空と一になり

さいたま 小林京子

皆川更穂

溪流を風に逆らひ黒揚羽
初浴衣何やら少し男前
葉先垂る天道虫の重さかな
声色と音で客寄せ風鈴売

白皿の枇杷の一枝を絵にとどむ

山岸久美子

篠崎紀子

枇杷たわわ戦ひやまぬ人の世の
遠山を背に広ぐる青田勢ひをり
次世代に贈るよきもの青田かな
銀河へと夢の旅する星まつり

潮騒遠く青田道行く人ひとり
産毛立つ枇杷の一枝陶工房
筆談の末に指さす庭の枇杷
夏の夜の書架に「怪談」息ひそめ
白靴の妻はジョギング火宅僧

河鹿笛父母の青春聞かぬまま
片蔭を伝ひて逢ひぬ旅の猫
炎昼やポストの口に手を噛まれ
箸置きは珊瑚のかけら海の日
ドジャースとカサプランカのある朝餉

ダービーや抜いて占ふ福白髪
夏木陰疑り深き鴉の目
黒白の傘の物憂き真夏昼
片蔭や天守に残る松一樹
雲の峰城を定むる算木積

肩書捨てて土用鰻にかぶりつく
土用鰻が玄関先に匂ひくる
福音に聞耳立つる金魚かな
一難の去りたる家や夏の昼
炎昼の地割れの田畑見届くる

若竹を刈りて茶室の連子窓
ぐづる子に短夜の風戦ぎをり
仏花売る男の耳環燕の子
いづくにて河鹿の笛や草枕
一村の寝静まりたる植田かな

さいたま 池田珪子

学生の手植ゑの青田すくすくと
古代蓮咲き縄文人の声聞こゆ
にはたづみ雲走りゆく梅雨晴間
役目終へ梅雨の街ゆく救急車
日輪や笑ひ止まらぬ氷菓の店

杉戸 佐々木史女

掛軸の草書の虜夏座敷

反町 修

梅雨明けや布団干したる東山

さいたま 千坂平通

選手団セーヌへ向けて夏の雲

梅雨明や山が招きて海が呼ぶ

落日やジヨガーを撫づる青田風

昼顔やアバンチュールの女たち

炭鉱の閉山メロン生くる道
新紙幣祝ふ式典蟬の声
梅雨明けに心機一転白き靴

七変化錆色兆す雨上がり

本橋稀香

拭きあげて玻璃戸に満つる雲の峰

森美枝子

遺影抱く母も交じりて山開き

低頭になほ吹き降りの山開き

次の風待つ風鈴に江戸情緒

貝風鈴大皿に盛る島の幸

読みさしの本を枕に午睡かな
借景の富士は茜に夏館
夏館優雅に歩くベルシヤ猫
投げ銭はギターケースやパリ―祭

炎昼や恐竜形の雲の影

霜多光代

若竹の光の中で坐禅組む

綿引まりこ

炎昼の止まることなき地下工事

万緑や福祉の宿の車椅子

出前そば片蔭運び運びゆく

梅雨寒や乱雲妖しく漂へり

有休の僧も川床夏料理
老鶯と僧の法華経競ひ合ふ
百日紅百日祝ひに咲き初むる

風鈴や生まるる風のファンタジー
信念を通す子育て南瓜蔓
射干の心射止むる立ち姿
道のべに人目を惹くや花芙蓉
梅雨最中降水帯に怖気立つ

若狭 岡本祥子

警策の音の強弱堂涼し
堀に映る雲の流れに乗る目高
糠床は暮しの香り秋茄子
草紅葉尾瀬の歩荷や奮ひ立つ
アルプスを遠目に余花の過疎の村

さいたま 香田裕誌

祇園祭行き交ふ人の美しき
餡蜜を前に笑顔で話し込む
蜥蜴の子颯と飛び出す尾の力
花合歓を見上げて笑むや老夫婦
病葉や雨に打たれて風を知る

さいたま 加藤でん治

「一緒になろう」と囁く螢の夜
紫陽花や家それぞれに色を成し
こんもりと裏口隠す四葩かな
どの部屋も物で一杯梅雨の家
梅雨明くる仰げば空の眩しくて

若狭 山崎郁子

鳥声は空のせせらぎ街溽暑
野球帽溽暑の熱を被りけり
向ひ風進んで受くる溽暑かな
溽暑の夜替へのシャンプーぶら下げて
食み出しの郵便受けにある溽暑

吉川拓真

梅雨晴れや吾を育てたる若狭富士
人見つけ小躍りする蚊敷の中
初めてや彼女と遠出夏休み
変はらぬもの昭和の夫と冷索麵
アッパッパ手首に輪ゴムある老婆

松村笑風

万緑や斧打つ響き森閑と
万緑やはや転勤も四年目か
万緑や発破の音に正気づく
山開き山行記録見る前夜
夜行着き待たるる今日の山開き

利根 倉田星歩

みどり児のふあつとあくびさくらんぼ
一匹の目高いういうお留守番
夜風止む甘い水へと螢かな
一刷毛の水彩にじむ梅雨晴間
梅雨夕焼回向柱の白き綱

さいたま 阿部貞代

夕立や植ゑたての苗倒しゆく
山開き富士山頂へひかり道
河童橋望む穂高や山開
引き潮に珊瑚現はる夏の海
梅雨出水夜半の闇に打ちつくる

さいたま 竹澤和子

砂風呂の砂の重さや卯波寄す
トラックの窓に足裏三尺寝
越路吹雪の流るるカフェや巴里祭
白南風や町を見下ろす伊予の城
打水に昭和の匂ひ立ち上がる

さいたま 大熊健司

白南風や生花教へ半世紀
アスファルトの憤怒を癒す散水車
打水や藍の作務衣の裾湿り
打水に始まる京のおもてなし
夏料理切子ガラスに発泡酒

湯浅 和

赤鳥居ひらりとぬくる夏燕
昼下り鳥は何処へかき水
すれ違ふお喋りの夏木木そよぐ
夕まぐれ風鈴鳴りて独りごつ
葉桜の迫り出す水面亀の甲

鈴木香音子

鬼怒川を渡るSL雲の峰
大仏の螺旋にピント雲の峰
昼寝覚眼の暗き檻の獅子
海風と汽笛の届く夏館
巴里祭や顎の堪ふる硬きパン

上 尾 室井早都子

夏深む雲湧く嶺の空広し
見上ぐれば螢の乱舞ここにあり
足元の螢の宿よびかびかり
四秒の螢の光七日間
青葉木菟松の樹の洞見守りぬ

小駒さち子

人招き人攫ひゆく夏の海
大き荷の歩荷尊ぶ山開き
青春の心変はらず山開
汗にじむ葉書の文字や宛名消す
梅雨入や空家手放し杭打たる

さいたま 小川洋子

鳥が鳴きせせらぎ耳に青胡桃
異国語多き江の電に乗り夏の海
いつの日か登りたき富士山開
夕立来て街を丸ごと洗ひけり
字余りに悩む俳句や青芒

森下美智枝

書を執りて黴の匂ひや祖母在す
無双窓我が人逝きぬ朴が香や
仄明り動かざる影守宮かな
青き嶺雲飄々と貫けり
肝試し赤禪が飛ぶ五間堀

さいたま 大熊道郎

A Iが汗をかきかき描く未来
焼鳥の煙の中で暑氣払ひ
体から悲鳴の様な蟬の声
灼熱の浜を跣足で飛び歩く
朝顔のしばむ姿に我笑ふ

東京 桐山遊童

夏の空アグネスラムのビキニかな
トンネルを抜けて湘南夏の空
目を細め駿馬眩しき夏の空
夏空へ前搔深し競走馬
ブラシ掛け駿馬嘶く夏の空

北山建治郎

さいたま 播磨 進

母と子のしりとり歩く夏の夕
甚平やBGMとスコッチと
尾瀬ヶ原天女の如き夏の雨
細流のかすかに響く登山道
雨上がり光る池塘に水すまし

吉川 杉浦千祐

門真宏治

山開金剛杖に鈴二つ
お多福も冷酒にぼつと艶めきぬ
軽羅の裾ふはりふはりと駅階段
万緑や哺乳瓶持つもみぢの手
空室の軒風鈴が鳴り止まず

酷暑の五千歩健脚組に入れませう
浴衣一枚貧者とならず夏過ぎぬ
ハンモック終の眠りのリハーサル
八十の夏樹木葬の下検分
ドア開けてベッド飛び込む夏のオーシャンビューホテル

江戸紫の暖簾揺れたり夏つばめ
炎昼の拾円銅貨なほ黒し
炎昼や欠伸のあとの部屋ひとり
夏の果残りわづかな名刺入
波おとの小出しになりて夏の果

さいたま 石関六弦

宮代 関谷多美子

万緑の参道伯父の耳鼻科医院
海の宿鉢に盛られし枇杷香る
津免多貝耳に当つれば夏の楽
夫の手術無事に終了半夏雨
小雨降る役所の敷地立葵

夏空へ松ゆつたりと二条城
雲龍に睨まれてをり京の夏
七夕飾りあまた並びし寺の庭
緑いつぱいトロッコ列車京の峡
五能線波しぶき受け夏の旅

春日部 仲田利子

蟬一夜我が家を宿に飛び立ちぬ
百寿迄歩くと誓ふ青田道
青田風命の限りペダルこぐ
ドローンを飛ばす研究夏の空
おはやうと犬に手を振る梅雨晴間

和歌山 南條さわゑ

梅雨晴や飛行機雲の吹き残り
しばらくは重き手足の昼寝覚
校庭の太鼓の響き雲の峰
アーチ抜け淑女の集ふ夏館
巴里祭王妃の踊るオルゴール

さいたま 穴戸洋子

目覚めれば月下美人の咲くけはひ
立ちこぎで友の背を追ふ夏の果
返信は月下美人が咲いてから
集まりて笑ひ転げて土用かな
カレンダー赤の丸つく土用入り

川口 新井のり子

短夜や二度寝を誘ふ貨車の音
短夜や言の葉つむぐ雨の音
螢火に思はずハモる小声かな
ローンして終の棲家や初螢
群れをなしかへす晩夏の魚影かな

秋谷風舎

月下美人輝き増しつ更けにけり
雲低く夏蝶も又低く舞ひ
翅ひろげ天道虫のドローンめく
祭神輿かつく漢の汗の佳し
夏柳倉敷川畔に憩ふ姉

さいたま 小山あつ子

不如帰野球野球と鳴いてをり
夕立や大きな欠伸のその後で
言の葉の出てこぬほどの暑さかな
夕立や地球の罪の洗濯機
浮き輪する吾子のプールの初泳ぎ

平野 楽

巢立ちしか無事に渡れや海と空
びつびつびつ目覚しとなる四十雀
片陰に人寄りて待つ交叉点
遠く聞く祭囃やりんご節
驟雨あがり水けとばして子ら帰る

駒谷行雄

秋麗と果物を乗せコンボート
黙約は叶ふものかな鱗雲
恨み有り人間だもの鳥兜
敬老日生きてるだけでめつけ物
浜の町女泣かする月明り

所 沢 関根千恵

大玉のダリア一輪テーブルへ
満開のダリアを残し家主逝く
青天に自由に摘むやダリア園
二枚目のハンカチ先づは眼鏡拭く
ハンカチや足湯の膝でそつと待つ

所 沢 飯室夏江

ほんとといふ音したやうな蓮の花
横綱の背中扇ぐは大団扇
震災のボランティア皆汗みどろ
夕闇を仄と照らして月下美人
梅雨に入る寝ぐせの強き白髪かな

東 京 畑宮栄子

朝練は何時も五時起き青田風
昼網に揃ひの法被土用の日
浴衣着て町内抜けて面映ゆし
照れもせず花柄を選る旅浴衣
夏蝶のひと休みする高架橋

大 阪 遠藤人美

武蔵野の湧水に螢一つ三つ
流れ灯や螢十日の恋に生く
塀越しのドライフラワー炎暑かな
遊就館後ろ手に出づ晩夏光
オカリナの歌口に鱗晩夏光

さいたま 前田夏野

校庭の寂となりけり土用入
蒲焼き食ぶる土用の丑の日なりけり
夏の朝うがひのあとの水一杯
ボール蹴る五人はつらつ夏休み
夕虹の美しき七色明日は晴れ

さいたま 高原和子

木漏れ日の光の衝立揚羽蝶
半夏生日増しに白き化粧落花
夏の朝まだ目覚めぬか木々静か
蛞蝓もビールに酔ひぬ草葉かけ
夏日差木々はれやかに風にゆれ

東 京 大島千恵

土用波四万十川の沈下橋
逢ふもまた別れのはじめ七夕星
AIとホモサピエンス七変化
山に雲野仏傾ぐ土用かな
短冊に名句の並ぶ七夕竹

山 下 ユリ子

絵葉書はマッターホルン夏燕
相乗りのバイク掠むる夏燕

さいたま 羽島秀子

「こつふや」と染めぬく暖簾晚夏光
夏深し恋の成就の絵馬揺るる
奈落より迫り出す化身夏芝居

手塩にかけて太き胡瓜の個性かな

篠原さよ子

若竹の夜風に戯るる葉音かな
をりをりに風鈴の鳴る新家庭

短夜の書いてまた消す締め日かな
早ばやと大樹を抜きて今年竹

緑陰や小さき祠に水供へ

石井直子

人の波くぐりてゆけり藍浴衣
腹這ひの犬に草の香溽暑かな

短夜や天然色の夢醒めて
頑健と言はれ続けて花南瓜

雨上がり葉裏にお化け胡瓜かな

鈴木藻好

月光にあごを突き出す胡瓜かな
甚平の居すまひ正す回診時

畦道が一本だけの日の盛
大木の病葉風が攫ひゆく

天道虫ついと飛び立ち西は吉
天道虫幸見つけたる葉群かな

さいたま 木谷葉子

履き慣れぬ下駄にそぞろや浴衣の子
末期伏せ母に購ふ浴衣かな
見過ごせぬ齢なりけり草むしり

若竹やスーツ姿に隙はなし

川島夕峰

三味の音に踊りの渦や鳴門渦
夏山や五人で分くる生命の水

冷素麺水は秩父の武甲山
さるすべり苦労苦労の果の白

五月雨や石鹸の香の強くなり
いつせいに楽譜をめくる夏館

横 石井妙子

下町の育ちさくつとかき氷
眼鏡から取れぬまくなぎ交差点

長尻に逆さ箒の溽暑かな

里の道安全祈願ダリア立つ
花束に主役のダリア母の手に

さいたま 緒方みき子

六十過ぎて好みの花や赤ダリア
刺繍する猫のマークをハンカチに

ハンカチで土産の饅頭ふんはりと

急ぎゆくせめて続いて片蔭よ
威勢よく挑むバズルに汗じとり
山法師無心の舞をちりばめし
梅雨じめり苛立ちの激辛カレー
大漢口いつばいにかき氷

東京 柳父はる

露店にも外国の人夏祭
雨止みて雲つきぬくる揚花火
エアコンを目で催促のコーギー犬
夏風邪や熱の園児はハイテンション
蟬なくや夫の耳にはとどかざる

鬼石 榊原聰子

かき氷崩れゆく美をすすりけり
氷切る人腕太ししぶき飛ぶ
仄かな香茅の輪くぐりの夫婦連れ
よるけつつ茅の輪くぐりて穢けす
木々の中施餓鬼の読経吸ひこまれ

深沢りこ

じつと見る塀の蜥蜴にをさなき手
黒南風や稚の泣き声路地の奥
黒南風や街中響く拡声器
柿右衛門の猪口に肴の夏料理
板場奥花一輪に夏料理

さいたま 武田重子

いとほしと螢を包む手の形
結び髪に螢の光る十五の夜
螢追ふ世界に二人きりの夜
ほうたるやまた立ち上がる朱里の城
晩夏光廃炉の壁を照らしをり

さいたま 横山礼子

雷門外つ国美女の浴衣かな
初デート浴衣の吾子の淑女めく
朝顔やビニルの遊具干されをり
夏の夕へそ取らると祖母の呼ぶ
炎天下サッカー女子の勇健さ

三浦真由美

キャンプ村静寂に残るカレーの香
子も育ちキャンプは一人肉余る
引きこもる子を誘ひだす夏の空
夏空やもがくアドバルーンひとつ
夏空や牧場に跳ぬる一歳馬

北出久美子

阿壇熱れ月桃紅き夏邸
白南風にわが身を散らすさがり花
リラの雨牧のサイロの老いし白
麩かく夜遊び猫の朝寝かな
山宿の卓に鯉こく茎わさび

石黒由美子

打ち来てはぶつぶつ帰り土用波
胸を打ち砕け散りたる土用波
浜を犬飽かずに走る土用かな
来るぞ来るきーんと呟く氷水
店先の旗を目当てに氷水

東京 山中いちい

炎昼は完全防備会釈のみ
炎昼の演説万雷の拍手
玉葱よ目指せ飴色この辺で
雨間や米買ひ走るセールの日
アレンジレシビの頼みの綱や小玉葱

さいたま 小田三茅

近頃の男日傘を所望せり
七月や今か今かと待つ初産
風鈴と風のハーモニー高野駅
大の字になりて昼寝の四畳半

和歌山 嶋田洋子

歓声に螢ますます光りけり
お隣と安否確認簾越し
迷ひ人お尋ね無線街晩夏
ボランティア求むチラシや晩夏光

さいたま 樋口元美

日の盛旅のプランにかちわりを
夏燕風がぐるぐる帰り道
日盛りの葉陰にびくり虫揺るる
わくら葉や生きた証の赤き色

草加 持永喜夫

盆支度今年はすつかり娘におんぶ
夏旅や娘の土産は「旅人の木」
見に行かむ背中合はせの「双頭蓮」
竹の軸ねだる七夕五歳の児

藤沢 小島喜代子

お客かな梅雨の晴間の屋根の上
風鈴や百均の音のからからと
朝顔の蔓のおよげる屋根の上
令和六年ゾンビ行き交ふ夏真昼

大阪 飯塚智恵子

従姉の編む籠に螢の光交ふ
ほうたるや銀河鉄道案内す
蚊を一撃大谷のごとホームラン
百日草咲くがまま濃く供華となり

さいたま 糸井しるく

四十度間近の日盛の静黙す
日の盛室外機のみ気配あり
ゆつたりとされど隙無く夏衣
夏衣自己に厳しき人となる

岡田芳春

早起きし三文の徳打ち水を

白南風や峠の先はいろは坂

夕陽背にやさしく帰る又来るね

緋着て川面を漕いで白南風や

父の歳倍超え朝のさやけしや

「ゆきおちゃん」我呼び先生秋に逝く

父無し児励ます恩師夫妻春に逝く

主宰が添削をしている句があります。

提出した句を思い出して勉強して下さい。

さいたま 落合和枝

藤沢 藤田寛二

特集

俳文とは何か

堀切実／坪内稔典／浅沼璞

井上弘美／林桂

松下カロ／宮崎斗士

人と作品

河村正浩

『枯野の眼』

坂口昌弘

『忘れ得ぬ俳人と秀句』

巻頭三句

池田澄子／河原地英武

白濱一羊／松田ひろむ

水田むつみ／桑田真琴

今月の華

甲斐由起子／古澤宜友

俳句と短歌の10作競詠

大塚 凱＋菅原百合絵

成瀬政博

筑紫磐井

坂口昌弘

青木亮人

大西朋

井上泰至

神作研一

藤村公洋

堀田季何

二ノ宮一雄

一望百里



2024年11月号

10月20日発売 定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

作品鑑賞

山本鬼之介

青嵐杜の騎馬像ギャロップす 寺町知子

俳句に書かれている「杜」の文字から察して、この騎馬像は、鎮守の杜の境内にある森の中に在るものだと理解した。そして、次に考えたことは、騎馬像がどういう類いのものなのかである。先ず考えられるのは、近代的なものではなく、江戸時代以前の武将、あるいは、明治期の軍人の騎馬像である。腰には大太刀または軍刀を佩き、前者の場合は兜を、後者の場合は軍帽を被っている。眼光鋭い人物と躍動感の溢れた軍馬の姿が、杜の緑を威圧している。

木々の枝を揺らして吹き抜ける青嵐に呼び覚まされたのか、馬に鞭を入れて戦場を疾駆する益荒男の姿が、作者の脳裡に描かれたのだと思う。

日本の国内には、武将や軍人の騎馬像が多く存在するが、「杜の」の言葉を重ね合わせると、杜の都仙台の青葉城から見守っている戦国武将「伊達政宗公」の勇壮な騎馬像もびつたりだと思ふ。「ギャロップ」が実に効を奏している。

忠次の「忠」我にもありて青嵐 飯田忠男

掲句の「忠次」は、江戸末期の侠客の国定忠次（忠治とも書く）のことで、上野国国定村の富農の子として生まれながら、若くして遊侠の徒に交わり、二十一歳で博徒の親分になった。博徒同士のいざこざも多かったが、持ち前の義侠心から、飢饉に喘ぐ農民を救済するために代官所を襲って米蔵を解放したなどの逸話もあり、かなり荒っぽい所行を重ねた末に、四十歳の一八五〇（嘉永三）に捕縛され磔刑になった。新国劇の名演目「極付・国定忠治」では、名優・辰巳柳太郎によって、忠次の魅力が存分に演じられた。

上州に縁のある作者にとって、国定忠次は忘れ得ぬ男の一人であるはずで、青嵐の野を行く忠次の姿に自らを重ねているのである。

花道を退くや六方夜半の夏 菅原卓郎

歌舞伎十八番の一つである「勧進帳」の名場面を詠んだ俳句である。山伏姿に身を窶ぢした源義経と武藏坊弁慶ら主従一行が、加賀国の安宅の関で、関守の富樫左衛門から厳しい詮議を受けたが、弁慶が白紙の巻物を勧進帳として朗朗と読み上げるなど、機略を駆使して危難を脱し、その場を逃げ延びた義経一行の後を追って、弁慶が「飛び六方」で舞台の花道

を退いてゆく見せ場である。一八四〇（天保十一）年に、七代目市川團十郎が初演し、これまでに名立たる役者が弁慶役を演じてきたが、筆者にとつては、二代目・中村吉右衛門の演じた弁慶が、「鬼平」と共に生涯忘れ得ぬ存在であり、おそらく作者も同じ思いかと推察する。

後ろ手の農夫眺むる大青田 清水桂子

雨上がりの朝、自家の田を見回っている農夫の姿である。田植の後、順調に生育した稲が美しく並んでいる広々とした青田を眺めて満足げに頷いている。農夫の顔を見れば判ることではあるが、「後ろ手」にその時の農夫の心の内が傍観者に伝わってくる。傍観者も、農夫と同じように自然の恵みの歓びを実感しているのである。

向日葵や福助のごと並びをり 新 曆文

向日葵の茎の丈と花の大きさ、そして、その生態は人間的なものを暗示している。作者は、向日葵の花一つ一つを福助と捉えている。辞書によれば、福助を幸福招来の縁起人形と解説しているが、その説明からは、向日葵と福助との接点が見い出せない。僅かな振動で首を振る赤べこの郷土玩具のように、正座して首を振る福助人形を、いつの日かに実見した作者のイメージによって作句されたものかと思うが如何であろうか。

一番線に遅延の報せ晩夏かな 岡田宣子

この俳句から、或る地方都市の駅のホームを連想する。一番線であるから、この駅にホームが何本あるのかは不明であるが、少なくとも三本くらいは有るように思える。松本清張の鉄道推理小説のように、一番線で列車の遅延放送を聴いている人物に興味が湧く。夏の独り旅を楽しんでいる女性トラベラーを想像させるが、季語の晩夏が、その時の彼女の心の内を匂わせているようで、心理作戦の効いた作品だと思ふ。

山開き星空まさに別世界 菅原真理

山開きが開催された日の夜、現地の山の宿で夜空を眺めている。夜間でも常に明るさのある都会の空と違って、満天の星空が眼いっぱいに広がり、普段なかなか味わうことのできない至福の時を過ごしている。

三十年ほど前のことになるが、新潟県北蒲原郡の山の上にあるホテルで、筆者もこれと同様の体験をしたことがあるので、「別世界」という感激の気持がよく理解できた。

天上へ楽を奏づる古代蓮 丸屋詠子

蓮はインド原産のハス科の多年草で、夏季に紅色・淡紅色・白色の芳香のある花を咲かせる。早朝に開花して昼頃には閉

じてしまうので、最高の花の状態を見損なってしまうことが多い。元々仏教に縁が深く、極楽に咲く花とされているので、古代蓮を熟視していた作者に句意の発想をもたらしたのだと思う。

さて、下五に書かれている「古代蓮」であるが、調べてみるとその謂われはなかなか複雑で、千葉県に縁のある「大賀蓮」、埼玉県「行田蓮」、群馬県の「城沼蓮」などに関係しているようで、一四〇〇〜三〇〇〇年前とか二〇〇〇年前など、年代の溯及が古代蓮の呼称に繋がっているようだ。

かれこれ十年前になるが、群馬県館林市の城沼で蓮見舟に乗って蓮の花の中を巡った想い出がある。

初浴衣何やら少し男前 小林京子

今年初めて着た浴衣姿の男性を見て感じた女性の率直な思いが然り気無く書かれている。しかし、よく考えてみると、「何やら」と「少し」が厳しすぎるようにも思えてくるが、気心の通じ合った夫婦の日常の一齣と思うと実に微笑ましい。これから花火見物に出掛ける仲よし夫婦。浴衣姿の妻を見て夫の気持は、と思うのは野暮なことだろう。

次世代に贈るよきもの青田かな 山岸久美子

広大な青田が広がる穀倉地帯の夏景色である。青田波とい

う季語の傍題がびつたり動きのある青田を見ると、田を守り続けてきた累代の先祖の顔が見えてくる。大きな巨きな熨斗紙にすっぱり包んで次の世代に贈りたい青田である。

潮騒遠く青田道行く人ひとり 阿部幸代

荒磯から離れた処にある青田の道を歩いている人の耳に、岩に打ち寄せる潮騒が微かに聞こえてくる。ただそれだけのことを書いた俳句なのであるが、筆者には、自然の中に放り込まれた人間の孤独感が七・七・五の韻文から伝わってきた。

河鹿笛父母の青春聞かぬまま 森下山菜

旅先の宿、夕食後のひと時、遠く近くの河鹿の美声に聞き惚れている。河鹿笛を聞きながら何故かこれまでに両親の馴れ初めの話を聞いていなかったことに気付いた。何で今更と思つたが、きっと河鹿が橋渡ししてくれたのだと思ひ、また一頻り河鹿笛に耳を傾けたのである。

片蔭や天守に残る松一樹 皆川更穂

空堀や石垣の一部は残っているが、天守をはじめ城郭の建物は残されていないわゆる城址と称するものなのであろう。しかし、天守が建っていた一郭に、辺りを威圧するかのようく聳え立つ黒松の一樹が、往時の名城の権勢を誇るかのよう

肩書捨てて土用鰻にかぶりつく 篠崎紀子

中央官庁の高官か、それとも某県の知事か、或いは大会社の社長なのか。普段は肩書に胡座をかいて高慢な連中であるが、土用鰻の魅力には勝てないようで、お付きの者が眉を擧めるような食べ方である。なかなかリアルな俳句であるが、作者が何時か何処かで遭遇した実話なのかも知れない。

ぐづる子に短夜の風戦ぎをり 池田瑠子

二三歳の男児であろうか、何が気に入らないのか、就寝の時間が過ぎていのに何だかんだとぐずり泣きして親を困らせている。窓の外の庭には、青嵐が音高く吹き渡っている。その庭へぐずり児を放り出したいように思っている親の苛立ちが伝わってくる。

落日やジョガーを撫づる青田風 反町 修

ざらざらと田畑を灼いていた陽も西に傾き、夕焼空の彼方へ沈みつつある時刻、数人のジョガーが風の渡る青田の道を続く。その光景をメモ帳に書き留めている作者もその一人。ひと汗掻いたジョガーの肌に、青田を渡る風が心地好い。

次の風待つ風鈴に江戸情緒 本橋稀香

無風とは言わぬまでもそれに近い状態なのであろう。少し物足りない気もするが、続けさまに鳴るよりも、間を置いて鳴るほうが趣があつてよい。そんな興床しい風鈴に、作者は江戸前のしつとりとした風情を感じている。

出前そば片蔭選び運びゆく 霜多光代

そば屋の出前持が、片方の手の掌で盛蕎麦を沢山載せた角盆を持ち、頑丈な自転車で注文先に配達していた光景が、貴重な昭和の思い出として脳裡に刻まれている。平成・令和と時代が遷り、出前の様子も変わってきた。掲句の出前そばは、箱形の岡持を手に提げて自転車か、配達先が近所であれば徒歩で運ばれていると推察する。片蔭を選んで進んでいるのだから、バイクや自動車は使えない。

学生の手植ゑの青田すくすくと 佐々木史女

学生が、体験学習のために昔ながらの手作業で田植した苗が順調に育ち、見事な青田となつて学生達の瞳に映っている。農家の子ならいざ知らず、都会の子であれば、その感激は一人である。何の苦勞もなく日常口になっている米を、自らの手で作り、そして、稔りの秋を迎えて刈り取る時の歓びは、何事にも代えられぬものだと思う。学生達には、生涯忘れ得ぬ思い出になることだろう。

水琴窟

(八月号鑑賞)

池田雅夫

陽炎や一輛電車ゆがみ来る 山崎郁子

即座に光景が浮かぶ。単線路の静かな町であろうか。春日差しの中をゆつくりと走り来る電車。見慣れた光景ではあるが、真つ直ぐにのびる線路のむこうから、右に左に揺れながら来る「一輛電車」が「陽炎」でゆがんで見えたのだ。

若芝に脱ぎつ放しの赤い靴 森美枝子

萌え出たばかりの「若芝」の広場で遊ぶ子等。靴を脱ぎ元気に走り回っている。その元気の程を「脱ぎつ放し」で表している。そして、「赤い靴」とあるので幼い女の子であろう。うす緑のビロードのような若芝には女の子が似合う。

砂時計の砂の静けさ蝸牛 関根千恵

一分計、三分計などの「砂時計」。逆さにして、中央の狭いくびれから落ちる砂で時間を計る。細かい砂なので、たいがいは音がしない。その「静けさ」を「蝸牛」で現している。

リラ冷えや靴音硬き石畳 室井早都子

フランス語読みの「リラ」は通称「ライラック」と呼ばれている。札幌市の「市の木」であり街路樹にもされている。「靴音硬き」に「リラ冷え」が象徴されている。花ことばは、「恋の芽生え」などで、何やら心情を深く想像してしまふ。

出目金の動き程には進まざる 石関六弦

「出目金」の尾はたいがい「三つ尾」で、左右に振るものさほど進まない。よく観察されている。何年か飼われているのだらう。人影を見ると餌をもらえるものと、寄つて来たり水面に浮かんだりする。かわいいと思う要因でもある。

下校時につつじの蜜吸ふ黄帽の子 畑宮栄子

要素が多すぎるくらいがあるが、全くもって共感する。ロート状の「つつじ」の花を摘んで吸うと甘い。「下校時」の児のみちくさの原因ともなった。「黄帽の子」から「蜜蜂」を連想するのは飛躍しすぎだらうか。今時の子には無縁か。

筍のけものめく皮巻き落ちて 羽島秀子

「竹の皮脱ぐ」あるいは「竹の皮散る」の季語がある。あつという間に伸びる「筍」は下部から皮を落としてゆく。堅い毛に被われていて、「けものめく皮」に納得である。

倒立の名無しの山や代田水

飯室夏江

山村の田は近くの山を水源としている。水源の山の天辺近くまで開墾し田を作ってきた。「倒立の名無しの山」はそうした山が「代田水」に逆さに映っていることを表している。山を栄養にして苗が植えられた代田はやがて植田となる。

新緑や山もこもこと肩を張り

嶋田洋子

「新緑や」で切り、詠嘆すること、「山」以外の木々の新緑を詠い、その季節にも及んでいる。幾重にも折り重なった山の森が、冬を耐え春に目覚め、ようやく夏を迎えた悦びを「山もこもこと肩を張り」に込めた活気が伝わってくる。

あつばつば物干竿にひるがへる

石井妙子

今はもうほとんど見かけることがない「あつばつば」は、女性用のゆつたりとした夏用の洋服である。心地よい風に洗濯物がなびいている。その中でひととき「物干竿にひるがへつて」いるのがあつばつば。屈託のない様子が窺える。

アンカーの受け取る襷汗重し

横山礼子

「汗」には「玉の汗」などの傍題がある。しかし、「汗重し」は見たことがない。駅伝の「襷」である。前走者がつないで来た汗まみれの襷が「アンカー」に託されたのだ。

巣立鳥頭上注意の札のこる

北出久美子

公共施設の入り口の燕の巣であろう。数日前まで巣で鳴いていた子燕が巣立ってゆき今はもういない。そこには「頭上注意の札」だけが外されずに残っている。鳥たちの成長を悦びつつ、来年も再び戻ってくることを願っているのだろう。

母の杖にそつと手を添へ青嵐

鈴木香音子

生生と漲る青葉のころに吹き渡る「青嵐」。年配の母と一緒に外出したのである。さりげなく寄り添い見守っている。折りしも強い青嵐に「おつとつ」と、杖の母に「そつと手を添へ」気づかっている心配りがほほえましい。

石段を楚楚と降り来る日傘かな

高原和子

和服の御婦人と想像するが、そうとも限らない。由緒ある神社仏閣の「石段」であろうか。参拝を終えて静かな心持ちで帰る。その無駄のない落ちついた所作に見惚れているのである。一気に読み切り、「かな」で締める構成もみごと。

麦の秋日の出の前の一仕事

川島夕峰

時候の季語である「麦の秋」。その頃は日の出時刻が早く、日中の日差しも強い。そこで、「日の出の前の一仕事」という訳である。一仕事終えてから「朝食」を摂るのである。

大村節代 選

鼓
笛
集

風鈴や風に乗りたる神の息
瓜漬けて日付を記す手の祈り
藁の蛇が郷の道行く秋はじめ

「ラッセラー」雨の跳人はねとの意気盛ん
園児曳く小さきねぶたも武者を載せ
ガンダムのごとく出陣立佞武多

様々な人種の集ふ夏祭
パレードは神輿もサンバもよさこいも
中年の主役になれる神輿かな

阿部幸代

横山礼子

吉川拓真

真青なる空に挑むや緋のダリア
今朝の雨含みて青し露草や
鰯雲の群を梳く風軽やかに

巨火蛾を撃ち払はむと及び腰
我先に高祖乗りくる瓜の馬
晩酌や今日も健やか生身魂

幼らは朝から元氣浮いてこい
母を待つ朝顔の窓保健室
駐輪場ドミノ倒しや夏期講座

星祭りあの星何と声聞こゆ
送り火の煙去り逝く門かどの先
怨念を火床に残し大文字

台風ををどらされたり小旅行
子らにまだ頼られんとす生身魂
義実家より海運カレーのお中元

咽ぶやう揺れ移つるへり蟬の声
まどろむやうに初蟬の湯宿かな
夕蟬のつらなり鳴きて影絵めく

菅原真理

丸屋詠子

本橋稀香

倉田星歩

榊原聰子

霜多光代

初孫を授かる報や夜の秋
御用邸の塀はどこまで秋初め
裕次郎の灯台間近秋の海

鯖寿しの幟に釣らる宿場かな
ひとときの寺僧の教へ若狭の井
曼珠沙華た走り入らむ空の涯

通草取る遠き昔や山里で
炎天下路上で対話若者と
土用鰻一年冷凍寝かせたり

点滴を終えて帰りぬ秋暑の坂
秋晴れや潮の香のこすパイプ椅子
星月夜名を知らぬ星あまたあり

運動会赤い靴下履かされて
踊りは心こころは人を丸くする
立秋や旅の誘ひのメールあり

むくげ散るあたりぞ不意に抱かれたる
魂迎祖母の手をひく兄弟
定まらぬ母の視線やそぞろ寒

森下美智枝

耳たぶの固さを思ふ白玉や
もの憂しや枕の熱さ夏の風邪
麦酒を注ぐを褒められ旅の宿

秋谷風舎

かなかなの道かはたれ時を歩む
きみの帯ときをりのぞく踊かな
おそらくは伸ばせば届く天の川

南條きわゑ

父と子の揃ひの甚平綿菓子屋
秋めくや図書館に来る親子連
杖つきて一步一步にたでの花

新井のり子

ほうたるも銀河鉄道相乗りす
鰯雲めざして飛翔小鳥群
菊の香や常世の国のおくりもの

川島夕峰

秋あかね友を求めて乱れ飛ぶ
夕散歩からすうりの花迎へけり
稲光夕暮の家並身を伏せり

山下ユリ子

音も消え沖に佇む精霊船
もう行くの泣いてくれんね茄子の馬
踊りへと誘ふ孫の手いとほしき

山中いちい

石関六弦

湯浅 和

糸井しるく

大島千恵

持永喜夫

鼓笛集作品評

大村 節代

藁の蛇が郷の道行く秋はじめ

阿部幸代

大きな蛇が道の真中にいて先へ進めない。戻ろうと思っても、後からおそわれたらと一大事と考えて、立ち竦む。しかし、よくよく見たら藁があたかも蛇のような形をしていた。こちらへと先導してくれているようにも思われて、礼を言いつつ通り抜けた。

園児曳く小さきねぶたも武者を載せ

横山礼子

東北地方で行われる旧暦七月七日の行事。青森市は「ねぶた」、弘前市は「ねぶた」というと辞書にある。

掲句はねぶたなので弘前市の景と思うが、子供達の一生懸命な様が伝わって何とも楽しい。それラッセ、ラッセ。

中年の主役になれる神輿かな

吉川拓真

祭りは神輿の渡御と山車や楽車だんじりの巡行等が行われる。神輿の担ぎ手は、屈強な若者がよいが、角を曲がる時などは、経験が物をいう。街角では年寄りが音頭を取って、神輿は何事もなく進む。

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）

皆川更穂

大樺揺するビートや秋のジャズ

毎年九月に仙台市各所の屋外ステージで開催されるジャズフェスティバルは全国から多数のバンドと数十万人もの聴衆が集まります。コロナ前年に聴きに行った折、樺の聳える並木の傍のステージからの大音量のジャズのリズムに躍動した記憶で掲句を得ました。

訃報

季音同人 田 寺 玲 子様

令和六年九月七日 御病氣の為逝去されました。
謹んでお悔み申し上げます。

句集喝采

菅原卓郎

◆鈴木しげを「普段」

ふらんす堂

著者略歴 昭和十七年東京都生。同三十九年「鶴」入会。石田波郷・石塚友二・星野麥丘人に師事。平成二十五年「鶴」主宰継承。俳人協会名誉会員。日本文藝家協会会員。

著者は二十歳から俳句を始めたが、病に伏した環境からか、植物に関する造詣が極めて深い。有季定型のしつかりと地に着いた作風に感銘を受ける。

杼が二つ使はずにあり秋の宿
只管は歩くことなり柿の秋
そば殻を足して枕や昭和の日
菊炭の熾こしてありぬ文化の日
竹皮の 駅弁うれし山若葉

第一句、古い織機と共に「杼」が二つ無造作に置いてある。旅籠、時間が停止している様を秋の寂しさと共に詠んでいる。三句、そば殻の枕は頭に良く馴染む。昭和の臭いがする。

日脚伸ぶ駅の広場にケイナの音
さへづりや山桑の木の岐れみち
貌二つ寄せて雀や露の雨
まだ戦後いつまで戦後花カンナ
田螺鳴く利息が二円付いてをり

第三句、相合傘を決め込んでいる二羽の雀を、季語の露を使い上手く表現している。第四句、確かにいつまで戦後を唱え続ける続けるのだろうか。まあ唱え続けられる事は、平和の証である。

◆河村 正浩「枯野の眼」

東京四季出版

著者略歴 昭和二十年山口県下松市生。昭和四十四年「青玄」西内利行に師事。昭和四十五年「草炎」に入会。大中祥生に師事。昭和六十二年「四季」に入会。松澤昭に師事。平成六年「山彦」創刊。主宰。山口県現代俳句協会副会長。

本句集は、平成三十一年から令和五年まで、の作品より収録。コロナ禍で渾沌とした五年間で、もう二冊句集を上梓するなど、積極的な句作活動が垣間見える。

悪食は生きる術なり寒鴉
鳴かぬもの鳴かす俳人四月馬鹿
落花して熟柿は命散らしけり
弁当箱打ち捨ててあり神の旅
風に鳴り風になるまで枯蓮

第二句、俳句で「鳴かぬもの」を「鳴かす」代表が、亀と蚯蚓ですが、四月馬鹿の季語を据えて、諧謔性豊かな作品に仕上がっている。第四句、神様も御多分に漏れず、出雲の国への急ぎ旅では弁当を使い時間も惜しく、その弁当箱まで散らかして去ってゆく。神様も結構大変なんですな。

酒一合飲んで冬日の俘虜となる
その中に狂気がひとつ虫時雨
眼に残る忿怒の色やまむし忌
影持たぬもの紛れたる原爆忌
ほほづきの中は眠たくきつね雨

第三句、焼酎に漬けられた蝮の眼が、まるで不動明王の忿怒の形相然と捉えた観察眼がお見事。

網野月を選

山紫集

病葉や石牛撫でて風あらた

下川光子

病葉や朽ち果てしとき色放つ

野口和子

病葉を両手で受けて文庫本

河野はるみ

猿浸かる病葉の浮く野天風呂

岡田宣子

—以上特選

病葉や言葉貧しく一日終ふ

丸山マシミ

病葉の浮かぶ水面や笹の舟

青木鶴城

病葉や庵主の過去を繙いて

内田恵子

病葉の一夜の宿や地藏堂

秋谷風舎

病葉の色鮮やかに日記帳

飛永 鼓

病葉や水面に映るピカソの絵

新 曆文

病葉や二十四文字のパスワード

檜鼻ことは

病葉を添へて仕舞へり絵具箱

阿部幸代

病葉や脈拍さぐる細き指

綿引まりこ

病葉や長押の父の声知らず

荒井俱子

病葉の吹きかたまつてゐる浄土

池田雅夫

蜘蛛の子が糸を繋ぐる病葉や

飯田忠男

わくらは葉や兄と妹との別れかな

飯塚智恵子

病葉も在りて成り立つ自然界

川島夕峰

病葉やユーカラ語る夜の囀

池田珪子

病葉に残る青さや風に舞ふ

熊倉千重子

病葉の落つ我が肩に触れてより

石川理恵

病葉の落ち重なるや今朝の雨

倉田星歩

わくらはの貼り付きし窓ボサノバの朝

石関六弦

病葉を個性と生して大樹かな

小林京子

病葉や一寸法師どんぶらこ

石田慶子

静かなり病葉落つる音聞こゆ

小山あつ子

切株にかけ病葉をつくづく

井上玲子

歯科女医の窓に病葉研磨音

近藤徹平

病葉の風の吹くまま操られ

上戸千津子

病葉や枝に玉虫のとまりたり

榊原聰子

病葉の見え隠れする昼下り

梅澤輝翠

病葉のやうに散りし娘七回忌

佐々木史女

病葉のためたふ水面ささにこり

梅澤佐江

病葉や戦ひ終へし兵のごと

笹本啓子

病葉と道を分けたる通学路

遠藤人美

廃校の病葉過去は振り向かず

篠崎紀子

病葉やひとつの膝に落つ

大場順子

熟るる実に陰る病葉一二片

篠原さよ子

病葉やはりついでゐる窓ガラス

加藤でん治

病葉や飛ばされて单身赴任

渋谷さいち

病葉や風にまかすや流浪の旅

嶋田洋子

病葉や風のくれたる終着点

高橋満耶子

病葉を描きてこの絵の完成す

清水桂子

わくら葉の短かき命風に散る

武田重子

病葉やいかなる恋も惑ふもの

霜多光代

病葉の木に煙草の粘液を塗る翁

田中章嘉

病葉の縋るいちまい濡標

菅原卓郎

病葉の流るる川に詩のありて

寺内洋子

病葉や紅きいのちの散りゆかむ

菅原真理

病葉のその色通し散りにけり

寺町知子

わくら葉や腫瘍切除の手術の日

杉浦千祐

秩父路や父母の墓所病葉降る

仲田利子

病葉を拾ふ吾子の手傾ぐ首

鈴木藻好

病葉や木の根にしかとからみつく

南條さわゑ

水面に映る樹樹へ病葉ゆらゆらと

鈴木玲子

病葉や吾をめがけて肩に落つ

西幅公子

病葉の夜半の風雨に吹き散りて

関谷多美子

病葉や盗墨すれどアウトなり

野田静香

病葉の水へ水へと散り行けり

瀬戸雄二郎

青き沼病葉が降り日が昇る

野村美子

病葉や明治の詩人みな早世

染谷風子

進むより引くが肝心病葉よ

畑宮栄子

「病葉や紅一点の農学部

反町 修

病葉や「葉っぱのフレディ」読み返す

原田秀子

散るでなく病葉二枚揺れてをり

樋口元美

容赦なく病葉散らす筈かな

本橋稀香

病葉や世界の終はる音のして

日高道を

病葉や運命線は父に似て

森 和子

病葉の嘆きあふかに吹き溜り

福田千春

病葉の落つるにまかす山の寺

森川義子

病葉の枯山水へ落下せり

保坂翔太

渦ありて病葉もぐりゆくヴォルガ

森下山菜

病葉の飛び損ねたる鏝の樋

曲淵徹雄

病葉や病める我が前ふと落ちる

森下美智枝

病葉の慰み合ひて固まりぬ

正木萬蝶

病葉や小ぶりの門の比丘尼寺

森美枝子

病葉のまこと本意なき別れかな

松井由紀子

病葉やわが身の中にひそみをり

山岸久美子

病葉やはらり刹那に出会しぬ

松宮保人

病葉や流れの遅き目黒川

山下ユリ子

病葉や吾晩年の助走始む

松本光子

病葉の落ちてぞ赤き苔みどり

山中いちい

やはらかに病葉照らす陽射しかな

丸屋詠子

病葉や信号の音衝突す

吉川拓真

病葉の美しき装ひ胸にしむ

宮崎チアキ

病葉や本懐とげず逝きし友

横山君夫

わくら葉や一喜一憂かざしれず

持永喜夫

病葉の紅をロルカの詩に挟む

横山札子

山紫集作品評

網野月を

病葉や言葉貧しく一日終ふ

丸山マスマ

「貧しく」とは何とも謙虚の極みではないか。つまりは言い尽くせない程の、ものの哀れを感じ取っているということなのであろう。そこを作者が自身の「貧しく」に還元して、表現しているということである。座五の「一日終ふ」とは一日中、言葉にできないでいるもどかしさに明け暮れたというように解釈した。将に「一日終ふ」に作者の行動が凝縮されていて、創作への真摯な姿勢が清々しいばかりである。

病葉や庵主の過去を緋いて

内田恵子

中七座五の句意と、上五の季語「病葉」の取合せの仕組みが効いている句作りである。「病葉」のイメージは、過去に相当するのであろうか、それとも現在の「庵主」に相当するのであろうか。決して「庵主の過去を」暴こうというのではないのである。「緋いて」の意味上の主語を「庵主」自身とすればしみじみとした味わいが髣髴としてくるであろう。

病葉の色鮮やかに日記帳

飛永 鼓

「日記帳」の中に葉代わりに挟み置いた「病葉」の何とも「色鮮やか」なことであろう、と解釈した。葉は日記帳のための目印ではなくて、日記帳に記載する事柄の目印なのである。病葉の色が鮮やかだ、と感じる感性こそ俳人のそれなのである。そして「日記帳」に記した事柄も又「色鮮やかに」作者の心内に在るのである。

病葉や二十四文字のパスワード

檜鼻ことは

①なら理解できるのだが、PW^②にしては二十四文字は多い方である。いや多過ぎるであろう。ということは何か書き留めるか、もしくはパソコン自体に記憶させているということになるかも知れない。作者は記憶力が抜群に高いのであろうか。文学での「二十四」は魔法の数字である。それだけに作者にしか分からない秘密があるようにも考えられる。筆者なら二十四文字の内の幾つかが病葉のように虫食って思い出せない、ということになるのであるが。

病葉や脈拍さぐる細き指

綿引まりこ

「脈拍」を探ろうとして自ら手首を反対の手の指先で握ることがある。ちよつと脈が速いかな?と思ったりする時である。または近親者などの手首を握って脈拍を測ることもあるだろう。座五の「細き指」の持ち主に脈拍を測られていると

も解せるであろうか。上五で切れているので取り合わせの句なのであるが、どうしても脈を探られている方の体調が気になつてしまふ。

病葉の吹きかたまつてゐる浄土

池田雅夫

「病葉」は決して落葉だけではなくて、まだ梢に留まつて居る場合にも用いられる言葉である。むしろ梢に在るのが本来であろう。が掲句の「病葉」は、落葉となり、吹き溜まりに寄り集まつた「病葉」なのである。その吹き溜まりを作者は「浄土」と表現する。狂言「菊畑」でいう「かえで、ぬるでの落ち重なつた」景を惹起する。

病葉や石牛撫でて風あらた

下川光子

何処かの天神様を詣でての景であろうと推測した。今年の夏は猛暑日の連続であったが、その温気に負けた葉々が病葉となるのである。作者は境内の石牛を撫でて、ご利益を願つたのであろう。たちまちに風の新鮮を感じる事が出来た、というのである。座五の「風あらた」は、季語で表現することも出来るのであるが、これを避けて上五の「病葉」に夏の厳しさを予感させて、佳句である。

病葉や朽ち果てしとき色放つ

野口和子

上五の「病葉」は切れ字「：や」によつて中七座五と区切られている。「病葉」を見ていると、生あるものの最期こそ色

放つ」様が想像されるということなのであろう。作者にとつての「色」とは何であろうか。漢語的把握ならば情愛であろうし、仏教哲学的な把握なら表面的な形相であろう。筆者は「生来の美しさ」くらいに捉えたいと思つている。「病葉」を引用してこそその感慨なのであるから。つまり「病葉」そのものにも健全な葉々とは別に美しさを希求する作者の心が働いているように思われるからである。

病葉を両手で受けて文庫本

河野はるみ

「病葉」が落ちて来るその一瞬を描き出している。俳句の刹那観を余すことなく描き出している句である。刹那観などという語彙は不成立かもしれない。ただ無常観というとなかなからず仏教的な匂いがするものである。より自然に即した、いわゆるアニミズム的な感覚では刹那観と言つた方が、その句にはそぐわしいのではないだろうか。文庫本に挟んで葉としたものか、それとも押し葉として旅のメモリーにしたものか。

猿浸かる病葉の浮く野天風呂

岡田宣子

猿の楽園なのか、それとも人間も又この野天風呂に入っているのであろうか。それは兎も角、作者のこの景に対する第一印象は、まず上五の「猿浸かる」なのである。筆者もテレビなどで見たことはあるのだが、リアルにはまだ見たことがない。この「病葉」は梢に留まっている病葉ではなくて、落葉となつて湯面に浮いているものなのである。

『俳句界』 九月号

新作巻頭三句

山本鬼之介

奥右筆の裔の家とや白芙蓉
白砂を走る金木屋の零れ花
里山の照葉に映ゆる鬼瓦

一九三八年東京都生まれ。

七一年「水明」二代目主宰・長谷川秋子に師事。

二〇一八年「水明」五代目主宰を継承。

現代俳句協会会員。

句集に『マネキン』。

『俳句四季』 九月号

秋語り

山本鬼之介

奥つ城へゆく径飾る白木槿
昭和平成令和一緒に魂迎ふ
白萩の道来しひとの背に証
論客に待ったを掛くる秋の雷
年縞の湖面浮かせり稲光
嫂が湯気の向かうに衣被
競歩選手が普通に歩く菊日和
船宿の暖簾に触れて秋燕
弦月や不沈戦艦偲ぶ丘
草の罨つくりし花野いまもなほ
活魚の生簀に充つる秋思かな
車懸りの陣法いかに芒原
糸を張る老妓の眼夜半の秋
旧町名は「筭町」よ蔦紅葉
もどかしや図鑑小脇に茸狩
走りこむ少年独り秋の暮

『俳句界』 七月号

この本の一句
福神規子（「雛」主宰）

朗朗と

茂木和子

未だ揺れてゐるかあの時のぶらんこ

掲句に出会った瞬間、私は私の「あの時」はいったったのか、様々なシーンを思いだしていた。直近なら吟行に出かけた十日前の公園で座ったちよつと低めのぶらんこ。もつと遇れば、やせつぼちだった小学生の頃、立漕ぎでびゅんびゅん漕いだその高さで風の匂いと鉄の香……と思ひ出は尽きない。

掲句の「揺れてゐるか」に見られる助詞「か」の対象を定めぬ疑問に込められた「まだ揺れているかしら」といった極めてノスタルジックな詠いぶりが、作者の思い出の時と共に、鑑賞者の誰にも等しく過去を思い出させてくれる。同時に句跨りもたらず模倣とした雰囲気も見逃せない魅力だ。また季語は半仙戯やふらんこここではなく、ぶらんこという平明な響きが一番共有しやすい。こうした瑞々しい作品を詠まれる作者は実は米寿を迎えられたという。その気概は句集名「朗朗と」の基となった（老老を朗朗と生くげんげん野）からも察することが出来る。

野を行けばばつんばつんと秋がある
椿餅赤子に手相らしきもの
野水仙産毛きかれいな母の耳
金木犀蘭のどきかが覚めてゐる
あと五分待てば来る人夕霽

右のどの作品も平明でしなやかな個性が光り、実人生を直向きに、心豊かに、丁寧に生きて来られたことを垣間見る思いだ。

風花や人逝くことの素つ気なし

我々の年齢ではこのように直截に言つてのけることは到底出来ない。年齢を重ねてこそその滋味を覚えていただいたい思いだ。昭和十年埼玉県生まれ。「水明」一筋に歩み、結社の様々な賞を受賞されている。

『俳壇』 八月号

俳壇ワイド作品集
今月の有力同人

義理と薄情

保坂翔太

〔水明〕

村の義理街の薄情雁帰る
蛇の首擱んで自慢する少女
紫の唇 偲ぶ桑いちご
鄙の家に子ども八人聖五月
露の葉に掬ふ山水遠景色
緑蔭にリルケの詩集読み合へり
逆走の自転車 驟す街薄暮

◆作句信条

俳句は、日常生活の中から湧き出るものであり、感動を素直に詠みたい。その足跡を辿れば、おのずと自分の作風が見えてくる。作風が変わる時もある。それも又よし。そのような姿勢で俳句と向き合っている。

保坂翔太（ほさか・しょうた）

- 昭和20年新潟県生まれ
- 平成25年「水明」俳句会入会
- 平成29年「水明」新珠賞受賞
- 令和2年「水明」創刊90周年記念作品準賞
- 令和4年「水明」水明賞受賞
- 現代俳句協会会員、現代俳句協会評議員
- 埼玉県現代俳句協会理事



水明例会

第一例会（浦和）

茂和子
小林京子 報

保線夫立つ高架鉄道霧奔る
秋の宿衣架に偉ぶる男物
笈摺に「同行二人」みづびき草
水引の花や川音の途切れなく
吉兆や庭に水引咲く朝
複雑な高架鉄道都市炎ゆる
担架忙し終りの見えぬ暑さかな
災難の架線工事や鴨叫ぶ

喜恵
節代
卓郎
拓真
延昭
京子
和葉
和子
以上特選

稀香
マスミ

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 昇報

藪の中ばちばちと水引草
水引の花かたくなに揺れむとす
ぼつぼつとくれなるほのか水引草
夕間暮れ水引草の紅仄か
蛾も愛し高架索道ラストイヤ
今朝の秋書架に点字の案内書
松葉牡丹担架引き出す救急車

京子
和葉
順子
チアキ
拓真
喜恵
和子

以上特選

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

梵剎に異国の僧侶雨乞す
野も山もふくらみて見ゆ喜雨の中
乱れ髪濡るるにまかせ喜雨の人
喜雨最中躍る産土七福神
ネックレス外せは微熱夏の果
千鳥足浮きぬ喜雨の夜祝の夜
三尺寝活動写真の餉送り
火の酒を酌むや玻璃打つ灯取虫

星世歩
康夫
雅蝶
萬子
順子
千祐
徹雄
曆文
由紀子
マスミ
寛治
玲子
以上特選

以上特選



読みかけて脳内乱る蟬時雨

蟬の放尿けふの別れのごあいさつ

蟬涼し秩父を囲む山幾つ

網先を掠め一閃蟬の尿

わが心鼓舞するやうに噴き上ぐる

蟬鳴くは土中十年羽化十日

蟬時雨過疎の我が家の屋敷林

噴水と戯るる子らきやあきやあと

蟬時雨裏山迫る湯治宿

吟行の筆に姦し蟬時雨

ジージーと急かす蟬声帰宅の歩

初蟬や生き抜く姿勢風やさし

聞き漏らす一言吹き散る噴水

光子

延昭

昇

由紀子

玲子

行雄

でん治

修

寛治

曆文

マスミ

恵子

喜恵

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報
河野はるみ

ポストまで二百歩のみち涼新た

川なりに曲がる小径や夕化粧

夕化粧茜にしづむ秩父嶺

おしろいや路地の仕立屋灯が点る

ニコライの鐘の音渡る涼新た

おしろいや余所行きの顔洗ふ夜

新涼の深き眠りの誘ひよ

夕化粧母のほひの遠からず

義子

玲子

宣子

はるみ

佐江

〃

〃

はるみ

白粉花天蓋となす辻地蔵

新涼や上空一万メートルに

新涼や古民家カフェの太き梁

暮れなごむさ庭の明かり夕化粧

白粉花ままごとの莫塵残されて

白粉花の匂ふ道の辺置屋跡

若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 報
石田 慶子

火取虫夢寐にも忘れ得ぬ羽音

宿帳に書きし実名火取虫

火取虫山火事映す峰の雲

抗えぬ焰の中へ火取虫

電柱下の球児の素振り火取虫

隠れ十字の菩薩の膝に火取虫

今生の出口に狂ふ火取虫

火取虫俯せは雄これは雌

宿の灯や一足先に火取虫

文したたむる心もどかし火取虫

ドリフト族と灯虫乱舞す夜の埠頭

団欒の茶の間切込む火取虫

火取虫深夜テレビはバリ五輪

別荘地ヘッドライトへ火取虫

発光の地球の我ら火取虫

火取虫の一途の狂ひ羨しとも

身を焦がし無常となるや火取虫

義子

千祐

宣子

玲子

知子

佐江

月を

ひろこ

星歩

京子

千春

マスミ

萬蝶

月を

はるみ

佐江

千祐

詠子

星歩

京子

稀香

マスミ

鶴城

胴太き火蛾振り払ふ新聞紙

火取虫ガス灯の夜は青からむ

火取虫昔名主の勝手口

有終に美醜のありて火取虫

関西例会 (大阪)

森本 早苗 報

蜘蛛の罫に捕へられたる朝帰り

腹巻は祖母の遺言風天忌

青断腸午後光を全身に

踏み切つて秋風に乗るアスリート

子別れの鴉長鳴き裏の山

号泣の選手のエール立葵

よそゆきの顔のあけびや道の駅

大木に絡む通草の高笑ひ

秋風と来るチョコレート色電車

種痘跡のこる二の腕秋暑し

迷ひなく一直線に流れ星

立秋や灼熱地獄いつ終ゆる

山里の遠き昔や通草採り

あけびの味知らぬ平成三姉妹

あと五寸届かず悔し通草かな

大空を焦がさないで飛べぶんぶん

主語の無き話ながなが秋暑し

通草蔓引けば宙にて笑ふかに

鬼蜻蜓低く飛ぶ丘べり摘む

千春

ひろこ

慶子

萬蝶

道子

人美

玲子

和子

千津子

満耶子

洋子

早苗

和子

道子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

洋子

人美

玲子

千津子

早苗

各地句会



あゆみの会 (浦和)

流れ星俺の願ひを聞いてくれ
星流る人を見送る棧橋に
ふみちゃん五歳の仏赤のまま
星飛ぶや乗つて行きたし夫のもと
走り星老いても有りぬ願ひ事
地酒酌む香は蓼の花景色

めだか句会 (浦和)

緑銀に柚子坊列なりみちのくへ
秋めくや空突き抜くる紙飛行機
秋めくや風しなやかに旅心
菌形つく葉に芋虫のはみ出せり
秋めくや歌の翼にチェロ乗せて
秋めくや朝会ふ人と言葉増え
秋めきて旅の心を急ぎ立てる

山遊 和 倶子 重子 啓子 藻好
哲生 美津子 千鶴子 道代 灯留 鷹を

秋めくや夜風のなかを肩ぐるま
変容の柚子坊の舞ひ鮮やかに
日曜は平穩に過ぎ秋扇
ゴボゴボと秋雨を吐く庭の樋
台風来終日何も手につかず
秋めくやクレーン動かぬ七日間
期日まで言の葉つむぐ秋ともし

六弦 和子 知子 莊志 月を 鶴城 はるみ

裏町の樋に鈴なり青瓢
本当はあなたのことを常夏花
秋涼し珈琲はブラックで飲む
青瓢なにはの夢の軽さかな

道郎 月を 鶴城 喜夫

直子 風舎

操

葉子 真由美 鶴城 京子 宏治

美代子 清子 倭子 恵子 光子

玲子 千津子 早苗

野菊の会 (与野)

南瓜の花朝な朝な地の黄金
遊び足りない水が素足を離さない
水打つて秩父青石つやめけり
ひまはりや日傘雨傘これ一本
白南風やジャンクフードを漁りもす
命日の空なごやかに夏の蝶

野菊の会 (与野)

若鮎句会 (浦和)

淡彩で描く安曇野涼新た
新涼やべたべた歩くバグの足
浮浪雲瓢の向かう悠々と
涼新た雲の姿に心付く
青瓢顔を書きたくなる丸み
盆波や我が本復の朏しかな
地虫鳴く日本国中地震の巢と
軒先で出を待ち侘ぶる瓢かな

秀子 拓真 ひとみ 芳春 香音子 稀香 貴

神戸大池句会 (神戸)

潮目境走るヨットの風迅し
雨欲しや狭庭の石も残暑光
夏甲子園涙堪へる児に涙

水明熊谷句会 (熊谷)

窓のなき納屋に人声秋うらら
啄木鳥や豊かな森の立役者

秋うらら古書肆の主の鼻眼鏡
啄木鳥の音に目覚むる森の精

けらつき般若の面を打つ嫗
新しき顔の万札秋麗

一杯の幕間の紅茶秋麗

新樹の会 (浦和)

槍投の描く曲線秋の空

新涼や名画座を出て深呼吸

婉曲な身の上話稲光

秋遊贅の詰まりし曲げ輪つば

秋風や紆余曲折の人の道

曲者と噂のみな牛膝

新涼や銘酒迎ふる喉仏

円卓の会 (浦和)

盆の月五百羅漢を照らしけり

竹春や湖東に眠る秘仏達

シヤガールに会ひたくて秋美術館

盆の月更湯の影となりけり

揚花火箱階段を駆け上がる

月明やポップコインの塩・砂糖
村祭笛吹童子現るる
蝶嵐追ひせうせう仏ごころかな
祭壇に解体順序盆の月

燈女

栄子

徹平

卓郎

風子

卓子

秀子

道子

茂子

修子

風子

清吉

道吉

平通

徹雄

鶴城

修

道香

静香

京子

輝翠

拓真
翔太
月太
鶴城
こざつぱり古暖簾そよぎ処暑の風
文芸誌に付箋数多や夜半の秋
聴くことも芸のうちななる夕端居

拓真

翔太

月太

鶴城

延昭

由美子

俱子

美枝子

早都子

洋子

昇

延昭

佐江

徹平

義子

忠男

翔太

桂子

幸代

美子

久美子

卓郎

小梅の会 (浦和)

片膝を立てて爪切る敗戦日

盆の月しかめ面した父の顔

縁台にすわりてひとり夜の秋

静寂の北方稜線秋来る

一切は深山幽谷岩魚釣

たかな俳句会 (川口)

流灯やしやがみて送る土手の端

わが項までも火照るや処暑の夜

長髪もゐて高校球児処暑の風

流燈や帰ることなき母想ふ

グロープの「入魂」薄れ残暑光

離れ難き御霊あるらむ流灯会

櫛の会 (浦和)

露草の際立つ瑠璃や雨上り

露草や線路の際の地蔵守る

音もなく腕によりくる残り蚊よ

藍暖簾くぐる足元螢草

秋の蚊や風来坊の次男来る

秋の蚊のか細き声に寝付かれず

知子
チアキ
かつ子

隆文

恵子

隆然

道

謙一

のり子

小麦

小

鶴城

静香

裕誌

富子

文子

あつ子

朋子

千重子

蝸 蚪 の 会 (浦和)

蝸雲なほ色褪せぬ師の教へ

爽やかや備瀬の海辺の貝拾ひ

秋高し渡海文殊の御尊顔

改札の大輪の菊市長賞

品評会懸崖輪の点け難し

非核非戦こころ問ふかや菊の花

欠かさず飾る小菊や母思ふ

雲海に浮かぶ天守や朝日影

後手に見る空の広さや鯛雲

菊揺らす風は遠慮を知り尽くし

散華へと向かふ敬礼乱れ菊

菊の花咲かす余生や卒寿祝ぐ

野 ば ら の 会 (浦和)

高らかに終楽章を法師蟬

樹木葬一瞬風ぎて法師蟬

全力のあとの脱力法師蟬

つくつくし声なだれ込む鬼石谷

雨上がり瞬間にしてつくつく法師

珊 瑚 の 会 (浦和)

花芙蓉人の気配のなき屋敷

文月の草に実のある裏厨

「大型天注意」の札や紅芙蓉

風 舎

幸 子

礼 子

元 美

しるく

夏 野

さち子

英 子

ひさの

月を

鶴 城

宣 子

秀 子

夏 江

栄 子

茂 子

みさ子

廣 子

和 子

和 葉

本陣の構へ重厚白芙蓉

白芙蓉風の触れゆく喪の袂

文月や雨の明るき枯山水

ほろ酔ひの芙蓉の宿に解く旅装

たぐさんの天ぷらあげる秋初月

阿六櫛はまだ手つかずに白芙蓉

白芙蓉無人駅にも裾野にも

若 狭 水 明 会 (若狭)

片陰は商店街依怙轟頂

片陰へ連れて行きたや水子地藏

片陰や一直線の宿場町

片陰や寺の小路で線香買ふ

語り部の日陰に誘ふ宿場町

するすると灯照り沈めて冷素麵

人違ひされて外せぬサングラス

冷素麵無口で啜る角の店

冷素麵無口で啜る大家族

二人居の薬味それぞれ冷素麵

炎天の地藏に笠簀す老農夫

仕事師の片陰求め昼休み

阜 月 の 会 (浦和)

「あい」と書く園児もあたり星祭

初秋の古都をさすらふ一人旅

桐一葉坂ゆるやかに母の墓

かつ子

喜 恵

マスミ

昇

恵 子

史 代

節 代

和 風

保 人

八重子

初 花

祥 子

友 夏

白 鷺

こは

鼓

笑 風

寛 久

郁 子

山 菜

更 穂

光 代

園児描く画面いつばい赤カンナ

果樹園を抜けて盆花供へけり

パレットに朱庭園の初紅葉

七夕や秘むる願ひを墓場まで

舞ひながら桐の葉一つ音もなく

桐一葉踏めばぱりつとスイングジャズ

鶴 川 山 百 合 句 会 (町田)

払はれて暑気集まりし台所

町に野に広きあそびばはだかの子

身のほとり整然とさせ暑気払ひ

隣室は女性グループ暑気払ひ

ほろ酔ひのハグで別る暑気払

顔ぶれに尼さんもめて暑気払

祝宴に集ふ人びと喜雨の中

下戸悲し飲めたら楽し暑気払ひ

暑気払ひとて暫し源泉かけ流し

雛 の 会 (浦和)

こごだけの話聞き入る水中花

灯点せば笑ひかくるよ水中花

ひとり夜の窓辺にしやんと水中花

絵手紙に筆勢乗せて夏見舞

酒中花に晴れやかに宴夜は更けて

炎天や吸ひ込まれゆく地下通路

珪 子

紀 子

静 香

曆 文

美佐尾

きいち

雄二郎

月を

史 代

廣 子

千 春

萬 蝶

美千子

うさぎ

玲 子

喜 恵

チアキ

輝 翠

燈 女

公 子

佐 江

水明澤つくし句会 (大阪)

風鈴や風に奏づる賢治の詩
詫び言を逃しまま暮れ花芙蓉
あと五寸届かず口惜し通草かな

智恵子
人美
洋子

和歌山水明句会 (和歌山)

稲妻のたびに北山迫りくる
連絡船水母かきわけ出港す
処暑の道犬に引かれて父母の墓
水まくら首にも当つる浅き秋
夏の雨開会式はセーヌ川
蟬一夜我が家の植木宿として
登山道片手ですくふ命水
飛ぶ鳥の影淡々し今日の秋

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ

青葉の会 (浦和)

湯加減を夫にたづぬる秋の夜
縁側に南瓜ごろりと寝ころがり
婿が加はり早く終はるや盆用意
菜園に南瓜はびこりへそ曲がり
西瓜採る熟れの加減を試しつつ
菜園を自由奔放南瓜蔓
水やりの襲来逃ぐる青蜥蜴
天ぶらに欠かせぬ南瓜そば御膳
お煮染の加減見しつつ盆の月

美紗子
真理
美智枝
美子
公子
啓子
和子
洋子
輝翠

きざきサークル (浦和)

機嫌よき北信五岳今朝の秋
恙なく生きて健啖衣被
秋来る心気新たに身を正す
酒二合本音つるりと衣被
秋立つや優しくなりしゴリラの眼
立秋や山容確と筑波山
偉人などをらぬ家系や衣被
秋立ちぬ若妻の駆るコンバイン
秋立つや毗高き修行僧

昇
光子
和
健司
啓子
和枝

繭の会 (浦和)

パソコンフリーズ蠶斯は鳴かず
さりざりす昆虫好きな子を躲す
女手の篤き願ひや星祭
七夕や変はらぬ願ひ同じ文字
短冊の文字の掠れや星祭
七夕や母の短冊すてられず
七夕や父の癖字の文届く
一旦は歌手を目指せり蠶斯
鴨川に消ゆる京の灯大文字
蠶斯さざなスーツに伊達眼鏡
聊の褥に眠り星の歌
七夕や駄句の短冊五十枚
七夕まつり商店街を警察官

まりこ
さよ子
風舎
寿夫
和子
伸子
小麥
風子
珪子
夕峰
月を
鶴城
京子

りんどう俳句会 (浦和)

秋暑し廃品転がる河川敷
真ん丸に孕む牧牛鳳仙花
見尽くせぬループル美術館残暑
湯治宿連山染むる秋夕焼
明暗の別れし二人鳳仙花
涼新た明治の顔の新紙幣
残暑なほ駝鳥は空を飛びたくて
パチンコ店に軍艦マーチ秋暑し
登り窯火入れせぬまま秋暑し
残暑かな水飲む猫の丸き舌

寛治
君夫
順太
翔太
夕峰
徹雄
まりこ
風子
利子
卓郎

ミモザの会 (横浜)

まつさらな絵日記置かれ残暑かな
断捨離は一時中断秋暑し
朝顔や色水作る指まつ赤
公園残暑まだ尻上りできぬ子に
即興プギウギ秋暑の駅ピアノ
海底までも残暑人魚の目の虚ろ
おしやべりな鳥も黙る残暑かな
南瓜切る包丁古び我古び

慶子
詠子
栄子
史代
玲子
萬蝶
亜弥子
千春

山茶花 (浦和)

風鈴市ガラスのすれ合ふ音色かな
風鈴の風に旨寝の猫と夫

美江子
マスマ

芙蓉句会（浦和）

星祭り懐メロ唄ふ円眼鏡
雨上がり天に飛び立つてんとむし
天めざす翅の神秘さ天道虫
税子
仁
美子

芽吹句会（浦和）

初秋の禪林ひそと風の声
まつ直ぐに伸びゆく畝や稲穂波
理由ありてことしの木権一花なり
初秋や竹林の風招き入る
夏五輪慟哭の敗者の足裏
白木権かつて踊りの師匠宅
縁に母庭に底紅風ひとすぢ
真つ直ぐに立ち上がる子等平和祭
山上の池塘より知る初秋かな
玲子
久美子
富子
修
弘子
千重子
ひろこ
チアキ
道

誤植訂正

九月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

二九頁上段 福田千春

正 はんざぎの太れば稚の太る村
誤 はんざぎの太れば稚の太る村

水明通信

「カラオケ」のすすめ

もともとカラオケは余り好きではなかった。人前で歌うのが只々恥ずかし、順番が回ってきて渋々歌うのが常でした。ところが、コロナが収まり飲む機会が増える中、久しぶりにカラオケに誘われました。歌い出すと声がか細く、まるで御詠歌を唱えているみたいでした。やはりコロナの期間お籠りの生活の影響が、こんな所まで出て来たのかなと思ひ知らされました。それからはお誘いを受ければ、お断りする事なく積極的に参加し「勘」を取り戻そうと励んでおります。

菅原卓郎

昭和の名曲ばかりです。筆頭は青江三奈の「池袋の夜」から始まり、青春物、グループサウンズ、ど演歌、ムード歌謡と多岐にわたっております。「池袋の夜」の歌詞に出てくる美久仁小路をうろついた事も有りました。

九月末には秋田在住の同窓諸兄との、日帰り弾丸カラオケツアーを計画しております。安い大人の休日パスを利用して、歌いまくって参ります。勿論パスを使い、象潟など俳句に係る名所も散策して来ます。皆様大きな声で好きな歌を歌いましょう。

令和7年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。
新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和7年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 令和7年水明1月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。
尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

 2024年 **11** 月号

特集 俳句の「物語性」

○俳句における「物語性」とは何か
堀切克洋

○私が選ぶ「物語性」を感じる俳句
瀬間陽子 西村麒麟

○「物語」を意識して詠んだ句
堀本裕樹 金子敦 高柳克弘
佐藤文香

特集 俳壇タイムスリップ
あの日あの時あの場所で

- 初の女性主宰誌「玉藻」誕生
小野あらた
- 日野草城連作「ミヤコ・ホテル」論争
伊丹啓子
- 新興俳句弾圧事件 栗林浩
- 桑原武夫「第二芸術」論 勃発 田島健一
- NHK俳句の始まり 蜂谷一人
- 3・11 俳句は時事を詠めるのか 関悦史

クラヒア 俳句界NOW 川上良子

注目の句集
植田密 『志花』
古澤宜友 『月山』

「俳句界」投稿欄
一流選者11名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

株式会社 文學の森

第8回「水明塾」のご案内

【日 時】 令和6年11月30日（土曜日）

◆ 午前の部 10:00～12:30（9:30受付）

全句講評講座（対象：水明集作家）

（事前投句：当季雑詠2句）

◆ 午後の部 14:00～16:00（13:30受付）

講演（対象：水明全誌友、同人、季音同人）

・講師：秋尾 敏氏（現代俳句協会副会長、「軸」主宰）

・演題：「境涯俳句と写生句」

【会 場】 さいたま共済会館 501・502（5階）

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町7丁目5-14

【会 費】 午前の部1,000円、午後の部2,000円

【申 込】 11月20日（水曜日）までに巻末添付の申込書に
会費を添えて発行所総務部へお申し込下さい。

※昼食はありません。昼食、飲み物は各自で持参して下さい。

※午前の部の「全句講評講座」の受講者は申込みと一緒に当季
雑詠2句を投句して下さい。

※申込みの無い方は入場できません。

※状況によっては、内容を変更する場合があります。

事業部

水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞
の表彰
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状
授与
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行 事 ・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他
・アトラクション他

※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めて
ご案内致します。

「現代俳句カレンダー 2025」 販売のご案内

「現代俳句カレンダー 2025」ご注文の受付を開始します。
今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしております。

◆ **体 裁**：A 4判の上下二連

◆ **価 格**：1,200円 / 1冊（定価の2割引）

◆ **注 文**：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法[発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10月21日(月) お早めどうぞ!!

◆ **備 考**：①水明俳句会より下記10名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を（短冊揮毫）

大村節代 石山かつ子 大橋廸代

星野和葉 青木鶴城 石井喜恵 境 延昭

五明 昇

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。

葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、[総務部 日高道を]

TEL 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介
総務部長 日高道を

風 声

○俳句四季八月号——「季語を詠む」欄

秋雷や隠語を理解できぬ奴

鬼之介

○現代俳句八月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

そら豆や受胎告知のあさの風

池田珪子

寄付の名も揃ひ祭の灯がともる

井上燈女

洗ひ髪のままジン飲む摩天楼

小林京子

籠枕ふたつ並べて小半時

原田秀子

お水送りの碧潭眠る青時雨

丸山マシミ

田の神の輪投げ遊びか植田雨

本橋稀香

向日葵やたぎる思ひを抑へをり

葛城千世子

○現代俳句八月号——「『風を詠む』秀句を探る」欄

伊藤進氏の感銘の一句に

そら豆や受胎告知のあさの風

池田珪子

妊娘を知らされて、受胎告知と詠むことに俳味を覚える。

大天使ガブリエルの声が響いたのか、ダ・ヴィンチの画像を

思い浮かべられたのか、虚か。

そら豆は莢の中で子孫を継いでいる。そら豆と受胎が爽や

かなあさの風と相まって、お喜びが素直に平明に伝わる。ま

ずはご祝意を申上げる。

ところで創作の内容は作者の思想や人格とは必ずしも一致しない。宗教や人倫等には特に神経質になる。

同じく伊藤進氏の感銘八句抄に

洗ひ髪のままジン飲む摩天楼

小林京子

○現代俳句八月号——「第六回『現代俳句年鑑2024』を

詠む」欄

寺澤一雄氏の感銘十句抄に

冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋

染谷風子

○くぢら（中尾公彦主宰）八月号——「受贈俳誌美術館」欄

融通の利かぬ男の更衣

鬼之介

○こんちえと（関根道豊版元）七月号——「受贈誌お礼」欄

融通の利かぬ男の更衣

鬼之介

洗鯛はかなき重さ皿に盛る

大村節代

春日傘傾げ家庭裁判所

境 延昭

○対岸（今瀬剛一主宰）八月号——「結社誌を訪ねて」欄

中原修子氏の鑑賞により

野に遊びつくして替はる影の向き

山本鬼之介

だんだんと日が伸びてきました。明るい日差しの中、緑の

野へ出ておにぎりを頬張り、おしゃべりを楽しめる季節にな

りました。掲句の「遊びつくして」という表現から、楽しいひと時を過ごされたのだとよくわかります。正午には短い自分の影が、今は西に延びた長い影に変わっていることに作者は気づきます。来た時とは違う影の向きや影の形からかなりの時間を野原で過ごしていたようです。そろそろ家路につく時刻です。野で過ごせたことの満足感に満ち溢れた作品です。瞬間を詠むのも俳句でしょうし、時の流れを作品に閉じ込め愛おしむのも同じく俳句であると考えます。

○泰山木（松田碧霞主宰）八月号——「受贈俳誌紹介」欄

白鷺を遠見に映の蔵座敷 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）八月号——「諸家近詠」欄

山籠り終へたる行者余花の径 鬼之介

○笥（山本一步主宰）八月号——「受贈誌の一句」欄

人ありてこそその里山鳥帰る 篠崎紀子

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和六年八月三十一日現在 —

岡田宣子	10	口	山本鬼之介	50	口
匿名	100	口	合計	160	口

俳句

11月号 予告

10月25日発売

予価1,300円(本体1,182円)®

巻頭作品50句—正木ゆう子
作品21句—若井新一・權未知子

第70回

角川俳句賞

発表!

受賞作「熊ン蜂」50句……若杉朋哉

受賞のことは／候補作品15篇

選考座談会 仁平勝×対馬康子×小澤實×岸本尚毅

日本の俳人100

句集特集
柴田多鶴子句集『桐箱』

特別レポート 第27回俳句甲子園全国大会

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

後記

今夏の暑さは、白露を過ぎて、中秋の名月を愛でて、一向に収まりませんでした。

その暑い最中の九月九日、重陽の日に、かな女先生の句碑の清掃を主宰と幹事が行いました。

水明初代主宰長谷川かな女は、浦和市（現さいたま市）の名誉市民で、別所沼公園と調神社に句碑があります。二カ所とも自然が豊かで、句碑の回りは落葉や枯葉、塵等があふれていました。三年程前から「りんどう忌」を修する以前に役員が清掃しています。年に一度の掃除ですが、一年を経てかな女先生の句碑にご挨拶しても、以前とは比べようもなく綺麗です。

清掃の折、別所沼の句碑は青木鶴城氏、調神社の句碑は日高道木氏が、薄れた句碑の文字に白を加筆なさいました。綺麗になりましたので、秋日和にお出かけ下さい。

かな女先生は歳時記に「かな女忌」九月二十二日に亡くなられたので、「竜胆忌」で掲載されています。そこで句碑を清掃して竜胆を捧げます。清掃の二〜三日前に

水明御用達？の花屋さんに注文にいききました。すると「今年は竜胆が高いので、去年よりぐっと少ない本数ですがいいですか」と言われました。「予算が少ないので頂ける本数で。今年はこの暑さだから仕方ないです。」と言うと花屋さん曰く「暑さじやないの、長雨やら集中豪雨だからですよ。竜胆は上を向いて咲くので雨が花に入って駄目になってしまおうのです。」初耳でした。私は注文だけで網野月を氏が前日受け取って、水揚げをして清掃の折お持ち下さいます。

曼珠沙華あつまり丘をうかせけり

別所沼公園

生涯の影ある焔の天地かな

調神社

若狭にもかな女先生はじめ多くの水明の先生方の句碑、特に鳥羽谷元主宰島津城子先生の句碑があります。それ等の句碑を若狭の皆様が守って下さっています。

今年も熱中症の方が異常に多くて、体力の衰えを訴える方が多かったです。食欲の秋を迎えて沢山食べて少しでも元氣、いや空元氣でも……。

(節代)

今月のはてな？

架(たな)

認(したた)める

老次(おいなみ)

射干(ひおうぎ)

衣架(いか)

鬼蜻蜓(おにやんま)

散蓮華(ちりれんげ)

浮浪雲(はぐれぐも)

裸嵐追(すがれお)ひ

備瀬(びせ)

渡海文殊(とかいもんじゅ)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願います。)

頁 25 32 40 43 70 71 72 73 74

水明

令和六年十月号

通巻一一二九号

令和六年十月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一一、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人

山本鬼之介

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

人に逢ふこともまれなり螢の夜
火取虫ガス灯の夜は青からむ
稲妻の寸描美しき散居村
手花火や本所小路の宵の闇
向日葵をどすんと活くる面構
十代の男子逞し益太鼓
蘇るうつつし世の色喜雨の中
秋涼し指しなやかに伎芸天
川なりに曲がる小径や夕化粧
葛の花リアスの海へ迫り出しぬ
川の字の真中しれつと竹夫人
滑走路 世界知りたき墓
花火師の魂咲かす未知の華
夕化粧母のほひの遠からず
雷遠く断髪式の大銀杏
潮路行く島の学生青蜜柑
潮騒の磯辺にふたり星月夜
まだ巧く鳴けぬつくつくほふしかな

栢尾さく子
菊池ひろこ
五明昇
境延昭
椎野美代子
島津初花
大場順子
梅澤佐江
森川義子
松宮保人
正木萬蝶
近藤徹平
野田静香
河野はるみ
曲淵徹雄
保坂翔太
笹本啓子
石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

青嵐杜の騎馬像ギヤロップす
 忠次の「忠」我にもありて青嵐
 花道を退くや六方夜半の夏
 後ろ手の農夫眺むる大青田
 向日葵や福助のごと並びをり
 一番線に遅延の報せ晩夏かな
 山開き星空まさに別世界
 天上へ楽を奏づる古代蓮
 初浴衣何やら少し男前
 次世代に贈るよきもの青田かな
 潮騒遠く青田道行く人ひとり
 河鹿笛父母の青春聞かぬまま
 片蔭や天守に残る松一樹
 肩書捨てて土用鰻にかぶりつく
 ぐづる子に短夜の風戦ぎをり
 落日やジョガーを撫づる青田風
 次の風待つ風鈴に江戸情緒
 出前そば片蔭運び運びゆく

寺町知子
 飯田忠男
 菅原卓郎
 清水桂子
 新 曆文
 岡田宣子
 菅原真理
 丸屋詠子
 小林京子
 山岸久美子
 阿部幸代
 森下山菜
 皆川更穂
 篠崎紀子
 池田珪子
 反町 修
 本橋稀香
 霜多光代

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木和京子 林 京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青中みどり 木 鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲 淵 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜 恵 反 町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はる み
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石 田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋 勉 代	森本 早 苗

水 明

令和六年十月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第十号)

定価 一〇〇〇円